慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	産業主義者サン・シモン：「欧洲社会改造論」以後「新キリスト教」に至る迄
Sub Title	
Author	小泉, 順三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1930
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.24, No.8 (1930. 8) ,p.1227(65)- 1303(141)
JaLC DOI	10.14991/001.19300801-0065
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19300801-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

は繼起の齊一性である。之に依つて社會靜學と社會動學の區別が生れる。前者は社會的結合の靜態を探究し、後者は進歩の法則を研究する。前者は同時的社會現象の相互的作用及び反作用の理論であり、後者は進歩的運動の狀態に在る社會の理論である。その各〻の詳細に入る事は本論文の目的と離るゝが故に、こゝには單に前者が後者の不可避的基礎なるを云ふにとゞめる（Logic. p. 598-9）。然も若し吾人にしてより良き經驗的法則を得んとすれば、社會現象の靜學的見解と動學的見解とを結合し、惟り種々なる要素の進歩的變化のみならず、各要素の同時的狀態を考察し、以て惟り各要素の同時的狀態の間のみならず、亦同時的變化の間の一致の法則を經驗的に取得せねばならぬ。この一致の法則がアプリオリに正しく驗徵される時、それは人類と人事との發展の、眞に科學的なる派生的法則となるであらう（ibid. p. 604）。

以上を以て、「論理學體系」第六編を中心とするミルの精神科學、即ち一般社會科學方法論の梗概を終る。特殊的社會科學としての經濟學の研究はこれを基礎とし、之によつて行はれなければならぬ。ミルが經濟學方法論に就いて如何なる見解を有し、又、その見解が如何にその經濟學研究の實際に就いて行はれたかは、私に與へられた次の問題であり、この問題の解決に、本論文の終局的目的は存する。他日私は筆を新にして、この稿を續けたいと思ふ。

産業主義者サン・シモン

――「歐洲社會改造論」以後「新キリスト教」に至る迄――

小泉順三

一　序論
二　十九世紀初葉の經濟狀態と經濟學説
三　復古黨と自由黨とサン・シモン
四　新制度の基調、産業と科學――生産者と不生産者の對立
五　産業者の意義――經濟學と産業の史的考察――サン・シモンの經濟史觀
六　政權より排除された産業者――政府は中間階級に――サン・シモンの中間階級批判
七　産業制度樹立の二條件――人智の實證化と國民能力の向上、
八　新制度樹立の平和的方法――輿論の獲得――財政行政權の委託
九　産業制度の特質――生産者の優越と政府の權力の減少
十　學者及王の地位――教權と學者――産業者の王
十一　新制度樹立の結果
十二　結論――サン・シモンの社會主義

一、序論

「一國は二つの見地から觀察することが出來る。其成員との關係に於いて、又他の諸國との關係に於いて、前者は內政を構成し、後者は外政を構成する。そして、兩種の關係は、同樣に重要なものである」とサン・シモンは云ふ。（註一）

ウォターロー以前のサン・シモンが、外政を專ら、彼の研究對象として居つた事は既述した如くであるが、其れ以後の彼は、急速に筆の方向を轉じて、內政に注目し初めた。

尤も、この何れの時代に於いても、彼の目的は、依然として、歐洲及びフランスに、決定的組織を與へる事にあつた。

サン・シモンは、この時以來、産業に於いて、歐洲及びフランスに決定的な社會組織を與へる理論的實際的基礎を、發見した。そして、一時は、それ迄に彼が抱懷して居つた觀念史觀を、全く忘れたかと思はれる程、否、思想史も結局は、經濟史によつて決定されると考へたかと、思はれる程社會進步に於ける、經濟的因素を强調したのである。

かくの如く顯著な彼の思想の變化は、然し、サン・シモンの空想的産物ではないので、當時のフランスに於ける社會狀態がしからしめたものであつた。

當時勃興しつゝあつた、フランスの産業的繁榮は、彼に强い印象を與へ、社會進步に對する其特別なる貢獻を、痛切に彼に感ぜしめたのである。

故に、サン・シモンの産業主義を理解するためには、この時よりフランスに逐行されつゝあつた一大經濟的變動を知らねばならない。

私は、先づ、十九世紀初葉のフランスに於ける經濟狀態を略述した後、彼の産業主義に言及しやうと思ふ。

二、十九世紀初葉の經濟狀態と經濟學說

二十世紀の産業的發展は、科學の進步によつて可能になつたのであるが、この産業の發展は、既に、ルイ十六世の時から顯著になつて居つた。

フランス革命が第三階級の革命であると稱せられてゐるのは、産業が革命以前に、早くも一大進步をして居つたことの、有力な證據である。故に、云ふことが許されるなら、産業のフランスに於ける凱歌は、革命がなくとも、恐らく一七八〇年代に發したものであるとも云へやう。恐怖時代すらも産業の行進を停止せしめるには無力であつた。

然し、霜月十八日以後、平和的事業は、或る輝かしさを以つて、ナポレオンの治下に於いて再び開始された。

大陸封鎖が、イギリスの商品に歐洲の一部分を閉鎖した結果、フランスの産業は新しい生産にいそしまざるを得なかつた。しかも、皇帝の土地征服は、この新興工業によく莫大な販路を開いたのである。

ナポレオンも亦、つとめてこれを奬勵した。十二年の勅令によつて定められた一萬フランスの奬勵金は、單に、科學、繪畫、或は演劇の最良なるものに交附されたのに止らなかつた。産業上の最

も有利な企、最も有用な器械に對しても與へられた。

我々は、レエジョン・ドノールを贈られた人として、リチャール・ルノアールやオペルカムフ等を擧げることが出來る。

政府の活動と相並んで、個人の活動も注目すべきものがあつた。

當時巴里には、自由思想家、富豪の一團があつて、産業改良のために務めて居つた。ラステリイ、グランド、及びド・ラボルドの諸氏は其首領であつた。

彼等は大工業家バンジャマン・デレゾールのサロンに集つた。このサロンで、一七五四年にロンドンに建設された、技術、製造業、及び商業の奬勵を目的とする協會から、イギリス人が如何に多くの利益を引出すことが出來たかといふことが、ラステリイによつて熱心に説かれた。

この結果、フランスにも同樣なものをつくろうと世人は決心した。一八〇二年に、國民産業奬勵協會が生れた。

然し、この努力は戰爭のために阻まれた。

勞働者の世界からは、しきりに平和が仰望された。一八一五年に平和が獲得された。そして、戰亂の結果、甚だしく貧窮に陷り、其上莫大な賠償金を戰勝者に支拂ふことを餘儀なくされたフランス人は、等しく、勤勉によつて富裕ならんとする激烈な希望を抱くに至つた。

尤も、王政復興の當初に於いては、白色恐怖（la terreur blanche）のため、又外國の占領のために、フランス國内の空氣は著しく壓迫されて居つた。然し、完全に平和が出現するや否や、國民は、上記の熱望に驅られて、一聲に勞働にいそしんだ。多くの操觚者は、鬪爭の時代の過ぎ去つた事、文化國民の間に可能なる唯一の鬪爭は、産業による平和的戰鬪である事を宣言した。

バシジャマン、コンスタンの如きは、既に、ナポレオンの沒落以前にそれを豫言することが出來た。其言に曰く「我々は商業時代に到着した。これが、必らず、戰爭の時代に代らねばならぬ」と。

この意見は獨りコンスタンにとどまらなかつた。

シャルル・コムト、及びデュノワイエによつて編輯されて居つた le Censeur européen には、この種の意見が間斷なく發表されて居つた。然し、自由主義の代辯者であるこの「歐洲批評者」には、適當に云へば、政治論しか掲載されなかつた。僧侶に對する、又移住貴族に對する爭鬪、特に思想の自由の擁護がその主要な目標であつた。

然し、同時に、この自由主義から數歩を踏出すべき氣運は充分に漲つて居つた。

一八一七年に現れたコムトの新見解には、經濟問題が第一位を占めた。彼は「フランス國民の精神狀態考察」に於いて、冒頭から、社會組織の必須的問題は財産であること、政府は、有閑階級に對して勤勉なる階級を保護する事を唯一の使命とすべきであること、ローマ人は世界を掠奪することによつて富裕になり得たが、現代の人は勞働によつてのみ生きて行かねばならぬことを立證してゐる。

又、有名なる一經濟學者ガニール（Ganilh）は彼の著作、La théorie de l'économie politique を次の如く結論してゐる。曰く

「人間が富有ならんとする感情によつて支配される限りは、そして、この感情は人類の生存する限り續くと信ずるのが正しいが、それを滿足する二方法しか存在しないだらう。即ち戰爭と掠奪、或は平和と商業、地上の王よ、選べ」と。

これらの論說は實際的結果を生じた。ブルボン王朝政府は、特に Decazes の自由黨內閣の下に、産業の組織と奬勵に着手した。一八一九年には、商業會議所及工業會議所がつくられた。同じ年に勸業博覽會を定期的に開くことが規定された。一八一九年の博覽會には、王によつて拾人の發明家が褒賞された。其中に、Jacquart, Koechlin, Firmin Didot 等を數えることが出來た。

Decazes は、亦、工藝學校に三つの新課目を設けた。機械學、化學工業、そして、最後のものは、最も注意すべき、産業經濟がそれであつた。この經濟學に關する課目は、斯學の權威であるセイに委託された。

これと同時に、多數の著述家は、英國の競爭に對抗するために採用すべき方法を、フランスの資本家に說いた。この中で最も有名なものは、Chaptel 及び De Laborde のそれであつた。(Chaptal, De l'industrie française 1819; Laborde, De l'esprit d'association. 1819)

嘗つて大臣であり且大化學者であるシャプタルは從つて學者としての權威に、爲政者としての經驗を併有して居つた。

彼の著述には先づ過去の統計表が掲げられ、次いで、製造工業と農業とは、相爭ふよりも、互に扶助すべき運命にあることが示されて居る。彼はフランスの農業の現狀と、其可能なるべき進步とを說明した後、製造業についても、其說明を加へ、且製造業者と學者とが相離れるに至つた障害が消失したことをよろこんだ。曰く「今日では、兩者の間に最も親密な關係が存在してゐる。製造業者は學者に諮り、學者は彼が遭遇した困難を彼に示し、製造業者は滿腔の信賴を以つて彼の忠言を容れる。彼等は一致して技術の完成に向つて進んでゐる」と。

ド・ラボルドは、社會秩序の唯一の原理を、産業の源泉である勞働だと見た。この産業には、農業、工業、商業を包含する。

「恰も哲學が思辯的科學のそれの如く勞働は幸福の實際的技術である」。然し孤立した人間は無力である。人間は協働を必要とする。人間が團體をつくる場合には二つの異つた組織が存在する。一は corporation であり、他は association である。封建制度の特長である前者は、民衆の解放によつて次第に衰退した。フランスを富ましし得るものはたゞ後者のみであると。

生産物の製造を目的とする association municipiles、生産物の增加を目的とする association industrielles,（銀行を意味する）、生産物の保障を目的とする association militaires、即ち國家の正規兵を彼は好のもしい association としてあげてゐる。

同時代人の大部分と等しく樂觀的傾向のド・ラボルドは、又社會の急速なる進步を豫測した。曰く「吾人は、讀み書き算術を知らぬ者、道德及び宗教を知らぬ者、又最後に、崇高な感情や有用な智識に於いて、他より劣つてゐる人間を、一人もフランスに見ない時代を既に豫見することが出來る」と。

彼は、産業を侮蔑する者を侮笑したが、同時に、人々を迷はす性急な立論家にも同樣の侮笑を以

つてした。

思ふに、此の二人の著作は、新生の平和的勞働的のフランスを生むべき國民精神のめざましいプログラム、最も眞摯な愛國心、最も崇高な感情を宣言したものと云ふことが出來る。

シャプタル、及び、ド・ラボルドが主張する點は、サン・シモンと同じく、單に保護されるのみならず、又尊敬されることが、産業にとつては必要であり、其時にのみ、産業はすべての優秀なる人々の注意を引くであらうといふのである。ド・ラボルドは、英國に於いては大産業家が貴族となり、ネルソン、ウエリントンと同座を占むるものである事實を世人に示し、シャプタルは、一職業に從事する人々に、彼等に相當した尊敬を政府が與へない場合には、彼等をして、自己の利益を犧牲にし、祖國の利益のために盡すと云ふ感情を失はしむるものであることを確言した。

他方、これらの人々が産業に實際的助言を與へてゐる間に、經濟學説は、ジャン・バティスイ・セイによつて、今日の體系を整へることが出來た。

セイはアダム・スミスによつて創設された斯學をフランスに紹介し、それを政治學及び行政學から切離して、政治經濟學の獨立性を公言した。

加納砲がカデイクスからモスコーへ轟いてゐた時、經濟學派は、國民は利益によつて結合するものである事、各國民の繁榮は他國に新販路を開くものである事、戰爭、禁止、獨占は罪惡であるばかりでなく、又誤である事を公言した。

セイは云ふ「君主は出來る丈少く、出來る丈費用をかけずに、治めるべきである。勞働者の安固を保證するにとめなければならぬ」と。

彼が一八〇三年に公刊した Traite d'économie politique は、一八一九年には第四版を出した。當時出版された無數の著述は、何れも、スミス及びセイを敷衍し、發展させたものにすぎなかつた。

この新學説は、然し、萬人を威壓するに至らなかつた。

理論的にも、實際的にも少なからぬ反對があつた。この討論は大なる範圍に迄及び、社會全體が經濟問題に至大の興味を覺える樣になつた。そして、それとともに、相關的關係をもつた社會問題が、世人の注目の的となり初めた。

經濟學者に對する第一の反對は、古い商業制度の支持者から起つた。

フェリイエは一八〇四年に公刊された彼の著、Du Gouvernement considéré dans ses rapports avec le commerce. に於いて、スミスに對するに、コルベール及びネッカーを以つてした。彼は、新經濟學が、生産のみを顧慮して社會の一面しか見ない事、徵利を保護し、智的勞働を輕侮し、密輸入をもよしとする事を指摘し、この自稱科學を攻擊した。彼は又、セイ、リカルド、マルサスの間に理論的協調の存しないことを笑つた。

この間にあつて、前述したガニールも、新科學の排擊に參加した。彼は、それが、純然たる思索に止る事、哲學的絶對的性質を有してゐること、理論の本源的で且必須的な部分である統計學はそれが等閑に附してゐる事を攻めた。そして、ネッカーが指摘した如く、無制限な自由、或は極端に制限された制度を非難した。

他の、最も恐るべき反對、直ちに其急所に迫る反對は、道德の名に於いて、この經濟學を叱責した。

彼等は、經濟學を以つて、富の生産方法に關する若干の風俗的考察にすぎざるものであり、且政治科學の根本要素を全く忘却してゐるものと見た。

この種の思想に於いては、第一に、其思想の奇怪さによつて人の注目を惹いた一著述、即ち、Ecrement の Entretiens et vues sur l'économie politique 1817 をあげる事が出來やう。彼はこの著に於いて、豫算は十五億に迄も上らねばならぬ、巨大な出費は貨幣を流通せしめることによつて國民を富裕ならしめる。僧侶は人口の五十パーセントであり、各區には一つの修道院を置かねばならぬ。男女子五百人を一團とし、各兒童に二人の教師をつけることによつて、教育は普遍し、一切の罪惡は消滅するだらうと考へた。このエクレマンの著述より遙かに愼重なものは Alubert de Vitry の Recherches sur les vraies causes de la misère et de la félicite publiques 1815 である。

ヴィトリイは、新學徒が經濟的進歩によつて起る道德的頽癈を考慮しないのを非難した。

曰く「富裕欲を貧者に起させ、其上、富の增加によつて國力を外部に伸張させる筈の我々の奢侈が、金を有せざる人を有する人の自由にし、前者を無力な欲望によつて頽癈させ、無味乾燥な勞働によつて愚鈍にし、後者を快樂に耽溺さす事によつて昏迷にし、卑俗奔放な情欲を助成して、社會の內部に不秩序の萠芽を不斷に釀成せしめる以外の事をしたとは、現今の經濟學者の主張ではあるが、少くとも疑はしい」と。

彼は政治經濟學といふ言葉に、社會經濟學なる名稱を置換した。何んとなれば、問題は全く社會的人間に關するものであるから、然るにスミスは、之れに反して、一切の科學の中で最も貴重で最も有用な斯學を、單なる産業の組織、手足勞働の一メカニズムに墮落させたのであると。

樂觀論は自由主義經濟學派の一大特長である。産業を自由に放任せよ、然らば、一切は都合よく進むであろう。彼等が筆を揃えて說くところはこの樂觀論であつた。

器械の發達、これは、幾許かの一時的困窮の後には、必らず、資本家には富を、勞働者には、安樂と物價の低落をもたらす筈であつた。セイ、シャブタル、及びド・ラボルドは、等しくこの器械の進歩を誇つて、器械の使用が勞働者の大部分から仕事を奪取すると云ふのは、教養のない者の根據のない危惧であると公言した。

然し、憂鬱な狀態が實際に勞働者を迎へて居つた。幾多の人命を浪費して、勞働市場の供給量を調整して居つた數度の戰爭が終局を告げるや、幾多の兵士は除隊された。そして、何れも故鄕を去つて都市に來り、盡きざる産業的豫備軍と成つたのである。當時、約七十萬の人々を擁した巴里には、六萬人の貧窮者が居つたといはれる。であるから、無産者の生活は、實に慘めで、政治上には權利なく、法律上には、職業組合の組織が禁ぜられ、この不幸な運命に飽く迄忍從して居たのである。加之、一八一七年の飢饉は、更に多くの農民を都市へ殺倒せしめた。

從つて、幾多の悲觀論者は、この新事實を指摘せずに居なかつた。社會主義の先驅者が貧者の分前を要求して立つたのである。

この人々の中に Fodéré なる一醫師があつた。彼の著、Essai historique et moral sur la pauvreté des nations は、サン・シモンの死する年一八二五年に漸く公表された。彼は利潤熱が一切のものを壟斷することを證明した。

「世人は至る所に富める如く見えんことを希ふ人々しか見ない。何故かなれば、彼等は貧者の外觀に附隨する侮蔑を恐れてゐるからである」。貧者は經濟的發展から何物も得なかつた。何故かなれば「道德は同樣に精神的生産を以つて進歩しなかつたからである」。經濟學者が、專門の會計計算から手を引き、あらゆる人々に、幸福な分前を保障する一組織が必要であると。

フォデレのこの著に先立つて、最も注目すべき著作が現れて居つた。シスモンディの著述がそれであつた。

このヂュネーブ生れの著者は、スミスの門弟の中に加算されて居つた。一八〇三年に公刊された彼の De la richesse commerciale はアダム・スミスの國富論と一致して居つた。しかも、この自由經濟學派の選手は踵をめぐらして、スミスに宣戰を布告するに至つた。

彼の改宗を決定したものは、新産業によつて引起された困厄であつた。彼は、自ら、社會の苦悶の狀況を、伊太利に於いて、スイスに於いて、又フランスに於いて目擊した。そして、又、イギリスに於いても、ベルギーに於いても同樣であることを敎へられた。ここに於いて、眞の社會問題に到着したシスモンディは、富を人口と關聯して常に考究しなければならない事、及び、政府は自由に放任するより寧ろ不斷に干涉しなければならぬ事を說いた。然るに、スミスは、たゞ富のみを考究した。

彼は亦、リカルドに答へて次の如く書いた。「經濟學は一計算科學ではない。一精神科學である。」と

彼は、一經濟學者としての立場に於いて、社會問題を論議した、恐らく最初の一人であろう。「一八三〇年以後のフランス社會主義者のすべては、それを知ることなしに、殆んどシスモンディを繰返してゐるのに過ぎなかつた」（註二）。

我々は、シスモンディの外に尙一人の有力な反對者をあげる事が出來る。それは、後にスイスに於いて急進黨の首領となつた Fazy である。

ファヂイはヴォルテールの L'homme aux quarante écus の形式になぞらへて L'homme aux portions を書いた。彼は本書に於いて、スミスが精神科學に分析を採用し、セイが政治經濟學に組織を與へたことを賞讃したが、少數者が富を壟斷してゐるフランスの現狀を嘆かざるを得なかつた。勞働に有利な、特に小有産者の勞働に有利な樣に、社會組織を全く變革しなければならぬと考へた。

サン・シモンが産業體系を發表したのは、かくの如き論爭のあつた時である。

サン・シモンが既述した中の重要なる著述、及び其著者を識つて居つたことは云ふ迄もない。彼はド・ラボルドには賞讃の辭を與へてゐる。シャプタルは、彼の編輯した雜集に著述の一部を載せてゐる。彼は、ラフォート・テルナーの如き銀行家及産業家を交際して居つた。

サン・シモンは、自ら經濟學者の門弟であると揚言してゐる。然し、Fazy の如く、絕對的信奉者

ではなかつた。彼はセイを中心とした論爭にも參加してゐない、當然其影響は受けてゐるが。彼は、然らば、如何なる立場に據つたか。

「彼の有力な獨創性は、彼に新らしい結論を發見させた。」（註三）。彼は徹頭徹尾サン・シモンであつて、シスモンヂイでも、セイでもなかつた。彼は純然たる經濟的見地から産業を觀察した後、直ちにそれへ道德的見地を加へ、彼獨特の體系を組織したのである。この間に於ける、即ち、一八一七年から「新キリスト敎」に至る迄の彼の思想を、彼の産業研究時代の産物として統合して見やう。

三、復古黨と自由黨とサン・シモン

ブルボン王朝復位時代の、フランス社會の經濟的政治的狀態は、次の如き諸事實をサン・シモンに提示した。

社會組織は少ししか完成されてゐない事、人間は未だ暴力と詐術によつて治められてゐる事、

政治的に云へば、人間は未だ不道德の中に沈淪してゐる事、

近代的工業の勃興につれて、ブルジョア階級の勢力が著しく勃興した事實

これらの事實は、サン・シモンをして新社會制度を考究せしめるに充分なものであつた。

當時の思想家哲學者はこれを三大別する事が出來た。復古黨、穩和黨、自由黨がそれである。この中何れの黨派がよく社會の指導に任じうるものであるか。サン・シモンは其の何れに對しても否定的結論を與へたのである。

第一の復古黨は舊政治制度及中世社會を辯護し、古代制度への復歸を希望するものである。彼等によると、最善最良の社會は、階級別と信仰の統一とを基礎とする社會、即ち、一方には封建制度內に於ける强者の弱者保護が存し、他方には、敎會、ローマ、カトリック敎によつて代表される平和と團結と慈悲とが存する社會であつた。

この意見は多數の崇拜者を有してゐる。Journal des débats 及 times は最もよく讀まれる彼等の機關紙である。シャトーブリアンの著作の如きは數千部をも賣つてゐる。

この復古的傾向はどうして生じたかと云ふに、十八世紀の希望と熱望とが、一七九三年の社會全般に及んだ混亂に直面して、感得された、失望と落膽に其地位を讓つたからである。丁度、新世界に對する確信に滿ちて出發した、クリストフ・コロンブの乘組員等が、希望の地を望見しうる前に恐怖を感じ、其舟を廻轉せしめんと欲したのと同樣である。しかも、この舟たるや、其出帆港に戻る事さへ出來ない狀態にあつた。即ち、彼等は、神聖同盟の弱點、自由主義の空虛を示し、一學說の必要を示す事によつて、古代制度への復歸を準備せずに、反つて新制度の到來に備へたのである。この故を以つて、ボナール、シャトーブリアン、メストル、ラムネ等は何れも彼等の目的と反對の方向に進みつゝあつた。

自由黨はこの派を攻擊して云ふ。封建的支配は壓制に過ぎない、基督敎的信仰の支配は迷信であると、彼等の批評眼にうつる中世は、一つの野蠻無政府の時代にすぎなかつた。

この派に對するサン・シモンの意見はどうであつたかと云ふに、彼は上述の批判に於ては自由黨のそれに贊同してゐない。

彼は既述した如く（註四）中世が、ギリシャ及ラテンの古代より優れたものである事を認めるには吝かでなかつた。彼は自由黨と全然反對した立場をとつて、あらゆる點から中世のすぐれてゐるのを發見してゐる。即ち、彼は、農奴制が古代の奴隷制度よりも進歩してゐる事、及び、中世の聖職者達は社會のあらゆる階級から採用せられ、從つて個人的才能が大いに斟酌された事を指摘した。彼は、荒地の開拓、紀念物の保護及神の名による休戰等によつて、聖職者達が文明に貢献した事を力説した。或は又、ジオセエフ・ド・メストルと共に、法王制度が當時の文明社會全般にわたつて一つの精神的紐帶として役立つた事、及び、當時の社會は眞のキリスト教共和國だつた事、更に又、假令中世が既往の數世紀に比べて、共學問發達の點に於て劣つてゐるとしても、近世の諸學問發達の準備をなしたのは、此の中世時代であつた事を認めてゐる。

一つの社會は、畢竟、それが共同の思想、共通の組織及び活動目的を有つてゐるときに於てのみ、而して又、一つの社會的力の指揮の下に自己の赴くところを知り、確信を以つてこの目標に向つて進むときにのみ一つの眞の社會である。サン・シモンによれば、これこそ、中世の社會が持つ一つの大きな優れた價値であつた。

若し、この點を強調するならば、サン・シモンは、復古黨の首領達と其歩調を等しくしたかの如く思はれる。然し、彼が復古黨と一致したのは、過去を説明するためであつた。コンドルセーの説に不滿であつた彼が、Oelsner によつて教示されて偶々復古黨の中世觀に於て、一致した過去の説明方法を見出したからである。云ふ迄もなく、サン・シモンの結論は、全然彼等から離れたものである。

第二の黨派は自ら穩和黨と稱してゐる。

彼等の企てるところは、古代制度と新制度とを融合しやうと云ふ、相反するものを混合しやうと云ふ甚だ不合理なものである。「この人達は調停者の職に上らうと考へて居るだらうが、善良な婦人の仕事程にしか相當しない。」

彼等の意見は民衆をよろこばせるが、何等の力も持つてゐない、何故かなればその意見は受働的なものであるからである。

カミイユ、ジョルダン、ギゾー等はこの派に屬してゐる。サン・シモンは、この人々を評して、常識家と神學者との中間者として考へられると云つてゐる。

第三の黨派は百科全書學者の後繼者達である。バンジャマン、コンスタン、ミネルヴ同人等の一派がそれである。彼等の勢力は甚だ強大である。ロベスピール、統領政治及ボナパルトを引繼き沒落させたのは彼等である。現在産業者階級も往古への復歸を恐れてこの派を支持してゐる。

一體、この派の本領は十八世紀及革命時代を辯護し、舊制度の破壞を任務とするにあつた。

從つて、彼等は破壞さるべき運命にある中世の封建制度を極端に攻擊した。復古黨の中世辯護に對し、彼等が、封建的支配とキリスト教的信仰とを、壓制と迷信であると批難したのはこのためである。ヴルテール及び、コンドルセーの考では、ギリシャ及ラテン古代は、中世に比し遙かに優れた文明開化の時代であり、政治的獨立と、文藝的名聲とを具有した時代であつた。

自由黨が、封建的神權的制度に代へるに、産業的科學的の他の制度を以つてする事が問題である

時に際し、前者が消滅しなければならないと云ふ事の必要を、よく了解して居つたのは確かに正當であつた。然し、彼等はそれ以上に爲すところを知らなかつた。即ち彼等がこの破壞に手間どつたでなく、徒らに無建設の破壞を行つた事は、彼等に確實な體系のない事と、從つて、彼等が偉大なばかり誤謬を犯した事、及びその批難に價するものである事を、人々に明示して了つたのである。

サン・シモンは、以上各派の言論及著述を注意して讀んだり聞いたりした結果、何れも、未だ新制度の概念を確保する迄には至らないといふ事を觀破し得た。(註五) そこで、サン・シモンはその何れからも努めて超越せんと試みた。

即ち、前述した如く、彼は、中世の社會に統一的價値、文化進運の勢を發見するに於て、正しく復古黨と其歩調を共にした。然し、彼の本意は、たゞそれを援用するによつて、彼の人性完成說を完成するにあつた。何んとなれば、元來、復古黨の理論は、一方では戰爭に、他方では信仰に、即ち、物質界に於ては力に、精神界に於ては臆說と推測とに、其立脚點を有つてゐるものであるから、「人類科學の覺書」に於いて、又、「萬有引力研究」に於いて、實證科學時代の到來を豫言した彼にとつては、既に老朽用ふるに足らざるものであつたからである。

故に、彼等の理論は、サン・シモンが從來の研究によつて明らかにした、勞働と科學と云ふ二個の新事實の前に、當然崩壞しなければならなかつた。

凡そ、富を獲得するためには、たゞ二つの方法のみが存してゐる。征服か、勞働かである。又、眞理に到達する道も二つある。機會と、科學の何れかである。中世は、征服によつて組織せられ、信仰なる一機會によつて導かれた。反之、新制度は勞働によつて組織せられ、科學によつて導かれねばならぬ事は明白である。

然し、建設の爲には、他を破壞しなければならぬ。こゝに自由黨の意義があつた。サン・シモンは、この點に於て又、復古黨をよく了解した如くに、自由黨の本領をもよく了解して居つた。

サン・シモンは、この科學と勞働による新制度の萠芽を、實に、中世の封建的な且神學的な社會の眞中に發見してゐる。一方には、都市の成立、他方には、アラビアの科學的文書の紹介、これら二つの事實は、中世の宗教的武力的な社會の胎內にも、既に勞働と科學との出現を豫示したものであつた。(註六)

此等の事實は次第に擴大された。コペルニクス、ルーテル、ヴルテール等は、引續き神權政治、法王制度、教會政治を根絶した。又、十八世紀の哲學とフランス革命とは、貴族政治と王政とを分解せしめた。この分解作用は確かに必要だつた。然し、それは終了した。舊制度の倒壞作業が既に終了した事の認知によつて、サン・シモンは、再び自由黨とも袂を分つに至つた。

「十八世紀の哲學は革命的であつた。十九世紀のそれは組織的でなければならぬ」、と云ふ卓越した見解によつて、サン・シモンは、自由主義一派の無肯定な否定、無建設の破壞、確實な體系の不用意權威に對する不信用を責めた。

こゝに於いて、一制度は他の一制度に代らねばならぬ。サン・シモンは、封建的神權的制度は當然其地位を科學的産業的制度に讓渡すべきであると定めたのである。

四、制度の基調、新産業と科學

――生産者と不生産者の對立――

思ふに、社會の目的は、「生活に有用なるものの生産」にある。生産によつて、人々を幸福ならしむるにある。

然らば我々は、如何なる狀態にある時、幸福であると云ひ得るか。

我々は、「人々が最良の衣食住を享有してゐる國、生活の必要品のみならず、奢侈品を到る所にて獲得する事が出來、又、最も容易に旅行しうる國を以つて、物質的關係に於いて最も幸福なる國である」と云ふ。又、同時に、「この國に於いて、人々の智識が發展してゐるなら、彼等が藝術を觀賞しうるならば、彼等が自然を修飾し得る手段のみならず、それを支配してゐる法則を知るなら最後に彼等が互に仁慈に富むなら、精神的關係に於いて彼等の幸福は最大限である」と云ふ。(註七)

舊制度は戰爭と征服、專制と迷信を、其活動對象とした。即ち人による人の搾取が、其特長であつた。然るに、この種の活動は甚だ危險である。故にサン・シモンは云ふ。

「事物に及す人間の活動以外に、人間によつて行はれる有用な活動はない。人間に及す人間の活動は、自體、人間に有害である。それによつて生ずる力の二倍の破壞のために、それは第二次的であり、且つ一大活動を及すために、自然と一致する時を除ては、それは有用でない」(註八)、新制度に於いては、かゝる危險を引起す事なしに、自然に對して働きかける事が出來る。何んとなれば、産業と科學とは、人間が自然に對して加へうる最も巨大な活動であるからである。換言すれば、新社會制度の窮極目的は「團結によつての地球の開發である」からである。

かくの如く、新制度は、生産的勞働を其基調として、物質に作用しかけるものである。

然らば、人間の生産的勞働とは何を指すか。生産的勞働は、これを三分する事が出來る。そして、それ以外のものでは決して、あり得ない。

即ち、科學、藝術、技術――多少の差こそあれ、この三つの勞働の唯一、直接目的は、社會の精神的及び物質的欲求を滿足さす事によつて、人々を幸福ならしめるにある。(註九)「人間の幸福のために、今日迄吾人が企てたものすべてに於いて、又いつも企てうるものすべてに於いて、科學、藝術、技術の既得智識を、直接或は間接に應用し、擴張し、或は完成しやうと企てる事以外には、嘗つて、又、常に、人間の運命の改良に有用なものは存しなかつたし、又存し得ないであらう」。

かやうに生産的勞働、或は産業の重要性を認知する事は、それに從事せぬ者に對して當然最大の侮視を與へる。

サン・シモンは、産業自體の重要性を認めると同時に、生産者と不生産者との鋭角的對立を發見して次の如く云つてゐる。「社會に眞に有用な一切の勞働は、この三方面に、しかも、この三方面のみに屬してゐる。これ以外には、吾人は寄食者と統治者しか發見しない」と(註一〇)。

彼のこの對立を、最も短的に、同時に最も巧妙に表示したものは、かの所謂寓言である。この對立が彼の體系の重要部分であるが故に、この著作も、彼の思想を知るに缺くべからざるものとなつてゐる。

サン・シモンは、産業を以つて人間の活動基準としたのであるから、この基準によつて、人類の上に、截然たる區劃の直線を引いた。社會は、生産者或は産業者と、非生産者或は有閑者との、二大陣營に分れた。寓言に、於いて、彼が示したものは、正しく、この對立の鳥瞰圖である。

彼は二つの假定を提出した。

一流の物理學者、生理學者、化學者、數學者、畫家、彫刻家、音樂家、文學者、器械製造者、建築技師、醫師、外科醫、藥劑師、水夫、時計師、銀行家、商人、農夫、鐵工所主、兵器製造人、製革工、染色業者、坑夫、鐵物業者、絹布製造人、麻布、綿絲製造人、金物商、陶器製造人、玻璃器製造人、造船業者、運送業者、金銀細工師、及其他金屬細工物師、泥工、大工、指物師、蹄鐵工、錠前工、鑄物工、及び、これに擧げてない種々の職業にある他の人々、約言すれば、科學に於いて、藝術に於いて、技術に於いて、最も有能な人々は合計三千人に上るであらう。今、これを、突然フランスが喪失したと想像しやう。

偖て、「この人達は、最も本質的な生産者たるフランス人、最も重要な生産物を與へるフランス人、國民に最も有用な勞働を指揮し、且つ科學に於いて、藝術に於いて、又技術に於いて、國民を生産的ならしむるフランス人であるから、彼等は眞にフランス社會の華である。」

「彼等は、全フランス人の中で最も彼等の國に役立つもの、最も多くの榮譽を得さしめるもの、その文明のみならず又その繁榮をも、最も發揚さす人である。」

從つて、彼等を失ふや否や、フランス國家は魂のない肉體になるであらう。對外的にも、又、「フランスが今日對等の地位を保つてゐる國に比べて、直ちに劣等な地位に下るであらう。」そして、「この不幸を回復さすためには、少くとも、フランスにとつて滿一世紀を必要とするであらう」（註一一）何んとなれば、實證的有用を有する勞働に於いてすぐれてゐる人は、尊い變則の人がある、しかも、自然は、この變則を無暗に浪費しないからである。

次にもう一つの假定に移つて見やう。即ち、「フランスが、科學に於いて、藝術に於いて、又技術に於いて、彼女が所有してゐる天才をすべて保有してゐるが、同時に、王弟ド・グレエム・オルレアン公、ド・ダレエム公夫人、ベリイ公夫人等々を失ふ不幸をもつたと想像しやう。

「フランスが同時に、宮庭の大官、國務大臣のすべて、顧問官、參事院議員、將軍、樞機員、大司教、司教、知事、副知事のすべて、各大臣に使用されてゐるものすべて、判事のすべて、それに加へて、貴族的生活をしてゐる人々の中で、最も富んだ一萬人の財産家を失つたと假定しやう。

「この事は、確かにフランス人を憂愁に閉さしめるであらう。何んとなれば、彼等は、しかく多數の同國人が突然消滅するのを、無關心で眺めることは出來ないだらうから。

「然し、國家の最も重要なるものと看做されてゐるこの三萬人の損亡は、彼等に純然たる感情的關係の下にのみ、悲哀を引起すにすぎないであらう。何んとなれば、その事から、國家にとつては何等政治的害惡が惹起されないだらうからである。」（註一二）

加之、かくして空虛となつた地位は、何人でも容易に滿しうる。

思ふに、フランスの繁榮は、科學、藝術、技術の進歩を促す事によつて、又、其結果としてのみ

享有される。然るに、王公、高官、僧正、將軍、及び、其他の有閑有産者は、科學、藝術、技術の進歩に、少しも寄與しない。彼等の與へるところは、たゞ害のみである。彼等は、今日迄、推測的學理が實證的智識の上に及して居つた優越を、更にのぼすことにのみ努力してゐる。彼等は、必然に國民の繁榮を阻害して、當然屬すべき最高の尊敬を、産業家の手から奪取してゐる。

「彼等は、國民にとつて無用な、彼等の勞働の支拂として、俸給、年金、恩賜、手當等の名目で國民によつて支拂れる稅金から、三千萬から四千萬の金額を、年々、奪掠してゐる。」

即ち「毎年租稅の半分は、彼等の間に分配され、被治者に利益になる樣には、租稅の三分の一も使用されない。」(註一三)かくの如く甚だ峻烈な批判を安逸者に與へた後、最後にサン・シモンは以上の二假定を綜合して云ふ、「現在の社會は實に逆立の世界である」と(註一四)。

何んとなれば、「貧民は富者に對して寛大でなければならなかつたと云ふ事、從つて、最も貧しい人々が、大有産者の餘剩を增すために、彼等の必要品の一部を、毎日放棄してゐると云ふ事を、基本原則として承認してゐるから、

「最大なる犯罪者、勇敢なる奪掠者、市民全體を搾取し、且つ年々三千萬乃至四千萬を彼等から取立てる人々が、社會に反する微罪を罰する職責を帶びてゐるから、

「無智、迷信、怠惰、冗費的快樂欲が、社會の最高主長等の配當物となり、有能にして、節約勤勉なる人々は、彼等の部下としてのみ、又道具としてのみ使用されてゐるから、

「一言にして云へば、あらゆる種類の職業に於いて、有能なる人々を指導する責務を帶びてゐるものは無能の人々である、又、道德關係から云へば、市民を有德ならしめる樣に命ぜられてゐる人々は、最も不道德な人々であり、賞罰權について云へば、微罪違反者の過失を處斷するために、大なる有罪者が任命されてゐるからである。」(註一五)

我々は生産者と非生産者の對立、或は、他の用語を以つてすれば、「蜜蜂と黃蜂」、「勞働者と安逸者」の對立に於いて、サン・シモンの社會思想の根本なるもの、彼の社會主義の出發點を見出す事が出來る。

從つて、我々は、彼の思想體系に於いてしかく重要な地位を占めてゐる産業者、或は、生産者の概を明白に決定しておかねばならぬ。

五、産業者の意義——經濟學と産業の史的考察

——サン・シモンの經濟史觀——

サン・シモンが、産業者、或は生産者の概念に與へた意義は如何。

この概念は、廣狹二義に解される。

廣義に解する場合に於いては、それは甚だ包括的であつて、工業、商業、農業のみならず、更に、科學及び藝術をも含んでゐる。社會的に有用な職業、或は勞働は、その種類を問はず、すべてそこに包括されてゐるのである。

サン・シモン自身の言葉を用ふれば、「産業は、其最廣義に於いては、有用なる勞働の一切の種類を包括するものであつて、理論の應用と同じく、理論其者も、又、手の勞働と同じく、精神の勞働を

も含むものである」と

彼は、又、學者、藝術家、及、技術者(註一六)を、「最も本質的なる生産者たるフランス人、最も重要な生産物を與へるフランス人、國民に最も有用な勞働を指揮し、且つ科學に於いて、藝術に於いて、又技術に於いて、國民を生産的ならしめる人々である」(註一七)と云ひ、或は、より簡約な言葉、「理論の生産者」「應用の學者」を用ひて、間接の生産者を直接の生産者の中に包括してゐる。

サン・シモンは、産業者を廣義に解した場合には、殆んど、「生産者」(producteur)、と云ふ言葉を用ひてゐる様である。そして、「産業者」(industriel)の言葉を用ひてゐる場合は、寧ろ狹義に解してゐるものと見て差支ない様である。但し、何れの場合も絶對的にそうではない。

今若し、廣義に解した場合に、如何なる職業が産業者の中に數へられてゐるか知りたいならば、前述した寓言の中に、それが紛らはしい程羅列されてあるのを發見する。そして、そこには次の様な細心的の注意まで附されてゐるのを見る。曰く、「多くの人は、余に、多種に亘る産業者階級の名稱の過剰を止める様に忠告した。余は、これを廢棄する意思をもたなかつた。何故かなれば、余の眼に映じた産業者階級の重要さと、全國民の眼に映らねばならぬその重要さとを證明したいと思ふからである」と(註一八)

次に産業者の概念を狹義に解した場合は如何。

「産業者問答」に於ける「産業者とは何ぞや」と云ふ疑義に答へて、彼が次の如き解答を與へてゐる場合は、正しく之を狹義に解した時である。曰く

「産業者とは、社會の各種の成員のために、彼等の欲望並に彼等の肉體的享樂を充足する、一つ或は數多の物質的手段を生産し、或は提供する人々である。故に、穀物を播き、家畜、或は家禽を飼養する農夫は、生産者である。車工、鍛冶工、縫工、指物師は産業者である。靴、帽子、羅紗、麻布、毛布の製造者は均しく産業者である。商人、運送業者、商船にのつて仕事をする水夫も産業者である。一切の産業者は、社會の總ての成員のために、凡ゆる物質手段を生産し、之れを彼等に提供して、彼等の欲望並に彼等の肉體的享樂を充すために協働する。そして、彼等は所謂、農民、手工業者、商人の三大階級を構成する」と(註一九)。

この定義に於いては、學者及び藝術家が除外されてゐる。王政復位の産業興隆期に於けるサン・シモンは、殆んどこの意味に於いて、産業者の概念を使用してゐる。そして、又、屢、それよりも狹い意義に用ひてゐる場合もある。即ち、産業と云へば資本主義的基礎の上に立つ大工業を意味し、産業者と云へば大資本家を意味してゐる場合がそれである。故に狹義に解した場合でも、二つの廣狹二様の意味に解されうるものと見る事が出來る。

然らば、産業或は産業者の概念を、我々は、廣狹何れの意義に解せば、サン・シモンの思想を正しく理解しうるであらうかと云ふに、その何れをとるも誤りでない。然し、彼の全思想體系から云へば、寧ろ、これを廣義に解すべきかもしれない。何故かなれば、彼の社會批判の基礎をなしてゐる生産者對安逸者の概念に、廣義の産業者概念は丁度一致してゐるからである。

蓋し、サン・シモンは、生産其者の價値と、重要性とを發見するに從つて、增々、遊惰者と勤勞者

との對立を痛感せざるを得なかつたのである。そして、社會の物質的精神的幸福を增進するために、人類社會に一人の遊惰者をもなからしめるといふのが、常に彼の理想となつて居つたからである。

彼のこの思想が明白に云ひ現されてゐる箇所を引用しやう。

「人はすべて働らくであらう。

人はすべて、余(神)の神智に人智を近づかしむるのを目的とする勞働を行ふ工場に附屬せる勞働者として自覺するであらう」(Saint-Simon, Oeuvres choisies vol. I. p. 3)

「人は働かねばならぬ。

最も幸福な人は働く人である。最も幸福な家族は、その全員が彼等の時間を有用に使用する家族である。最も幸福な國民とは、仕事をなさざる人が最も少ない國民である、若しも、有閑者がゐなかつたならば、人類は彼が欲求し得るところの幸福をすべて享樂するであらう。

余は勞働の思想に、その觀念が受くべき廣さを全部與へることが甚だ必要であると考へる。何人にてもあれ公職にある者、科學に、藝術に、製造業に、又農業に從事する者は、農夫が土地を開墾すると全く同樣に、擔夫が荷をかつぐと全く同樣に、實證的方法で働いてゐるのである。然し、自己の資産を生産的にするために必要な勞働を自ら指圖する地位に居らず、又指圖もしない地主や有産者は、彼が慈善好きである時でさへ、社會にとつては一つの繫累物 (une être à charge) である」と (Saint-Simon, ibid., p. 221)

産業者の概念の中に、科學者と藝術家とが嚴然たる存在を示してゐるのは、科學と智識との助を得て、この對立を消滅せしめる彼の意思が、明白に示されてゐるものである。

かくの如く、廣義に於ける産業者の概念は、サン・シモンの思想の本體をなすものであるが、狹義に於けるそれは、又、前者と異つた意味に於いて、即ち、新興勢力たる商工業の重大性を强調し從來、勞働と云ふ漠然たる名稱の下に彼が包藏して居つたものに、産業と云ふ具體的形態を與へたと云ふ意味に於いて、同樣の重要性を失はない。我々は、又、この理由によつて、彼の王政復古時代を彼の産業研究時代として、彼の生涯の他の時期と判然區別する事が出來ると云ふ、傳記的價値をも、そこに發見する。(本稿第二節參照)、

偖て、彼が産業の重要性を認知し、そこに新社會組織の原動力を發見したのは、當時興隆して止まなかつた大工業に、彼の天才的直感が投げかけられたのによるのであるが、たゞそれ丈ではなかつたのである。彼は觀察によつて得たこの産業の社會的重要性を確認するために、科學的な二方法を更に援用した。一は、當時漸く體系づけられつゝあつた政治經濟學であり、一は、彼の産業に對する實證的歷史的考察であつた。

サン・シモンは、經濟學の出生を重要視して云ふ、「實證的政治學が現在樹立されうるとするならば、それは政治經濟學の出生によるものである」と。

此新科學の諸原理は、「永久の人スミス」によつて、又、彼に從ふ多數の門弟によつて設置された。中でも、セイはスミスの著作を完成し、政治經濟學の學說的性質を力說し、且つ政府の誤謬に批評を下した。セイは、政治學がそれ自體によつて存在する事を證したが、更に、歩を進めて、それを

して行くところ迄行き着かせなかつた。

故に、我々は、これらの科學の中の一つが他のものに依存してゐる事、換言すれば、政治經濟學が、政治學の眞實にして、唯一の基礎である事を證明して、この結論を得なければならぬ。

サン・シモンによれば、セイの觀察した事實は次の如く公式づける事を彼に許して居つた。

政治學は、「生産の科學、即ち、あらゆる種類の生産に最も有利なる事態を目的とする科學である」、と云ふ公式づけがそれである。（註二〇）

政治は生産の科學であると云ふこの思想は、換言すれば、彼が、國家を一産業的團體と見た事を意味する。實に、サン・シモンは此の思想については最初の理論家であつた。（註二一）

エンゲルスは、この卓見を稱讃して曰く、「一八一六年には、彼は政治を生産の科學と解釋し、政治が全く經濟の中に吸收さるべきことを豫言してゐる。經濟事情が政治組織の基礎だと云ふ思想は、こゝでは、まだほんの萠芽として現はれてゐるとしても、人に對する政治的支配が、物に對する管理及び生産過程の經營に變ずと云ふ思想、從つて又、近來に至つて議論のやかましい「國家の廢滅」と云ふ思想が、既にこゝに、明白にされてゐる」と。

洵に、エンゲルスの云ふ如く、生産が政治科學の目的であると云ふこの思想は、人に對する政治的支配が、物に對する管理に變換する事を、其主要なる特長とする、サン・シモンの新社會組織の政治の根本的な理論的根據をなしてゐるのである。

かくの如く、觀念的に生産の科學を發見し得たサン・シモンは、更に、これを實證的考察によつて、即ち歴史的研究によつて確然と體系づけやうとした。曰く、「我がフランス社會の發生以來、今日迄の、産業及び産業者の政治的進歩の要約は、この事を完全に明かにするであらう」と（註二二）。

サン・シモンは産業者階級發展の段階を四個の時期に分つて説明してゐる。

曰く

第一期、フランス人のゴール征服より第一十字軍迄

第二期、第一十字軍よりルイ十一世迄

第三期、ルイ十一世よりルイ十四世迄

第四期、ルイ十四世より信用制度の導入に到る迄

而らば、フランス人のゴール侵入より第一十字軍に到る迄、産業は如何なる進歩を遂げ、而して産業者は如何なる意義を獲得せしか。

「フランク人のゴール侵入より第一十字軍に到る間に、極めて重大なる一個の政治的事件が、行はれた。此事件は、爾來文明に於いて成遂げられた一切の進歩、從つて亦、産業上に於ける凡ゆる進歩を準備した。此事件とは、征服者被征服者の融合、フランク人とゴール人とに依るフランス國民の組織であつた。

後年に於ける産業の進歩は、此時代に準備せられた。併し乍ら、斯進歩を齎すに特に貢献せしものは唯だ一つではない。

國民の軍事的指揮者たるフランク人は、又産業的勞働の指揮者でもあつた。全領土は、殆んど、彼等の所有となつた。同時に彼等は、又總ての耕作用具を占有した、そして、ゴール人は、體僕として、家畜中の第一階級であつた。大なる武器の製造者は、常に奴隷であつた。從つて、フランク人に從屬した。衣服の製造はフランクの婦人の嚴重な監督の下に行はれた。手工業者は尙依然として、隷屬の狀態に在つたとは云へ、此時代に於いて、漸次自家の地位を獲得し、私有財産を造出し、之を細心に蓄へる事が出來た。

次に、「第一十字軍よりルイ十一世の統治に至る間、何が發生したか。産業は如何なる進歩を遂げ、そして、如何なる原因が此進歩を決定したか。」

彼は、この自問に自答して云ふ、

「十字軍は、貴族即ちフランク人に、彼等の收入では支拂ひ切れぬ程莫大な負擔をかけた。そこで彼等は、入用の金額を調達するために、支拂能力を有したゴール人に自由を賣る事を餘儀なくされた。

「此自由を獲得したゴール人は、主として、他のゴール人よりも、私有財産を蓄へる機會と手段とを多く持つてゐた手工業者であつた。

「フランク人は、土地をも亦、ゴール人に賣却した。かくして、ゴール人は財産を獲得することが出來た。かくして、十字軍は軍人階級から區別せられた産業者階級の構成を促した。」

當時の産業者階級は、一、有産者、土地耕作者にして兵士でないゴール人、二、都市に集中せる自由手工業者、三、東洋に於いて生産せられた材料、及商品をフランスに輸入し、而して、國内では、フランス傳來のものを普及せしめた商人、この三部分から成つて居つた。

第三期に於いて、ルイ十一世はこの商業者階級と結合した。登位と共に、王政は政治的に尙薄弱であり、主權は依然として貴族の共有するところになつてゐるのを認めたルイ十一世は、全主權を王政の手中に結合し、ゴール人に對するフランク人の優越を撤去し、封建制度を破壞し、自らフランクの指揮者としてではなく、ゴール人の指揮者たらんとしたのであつた。

産業者階級も亦、主權を王政に結合することに贊成した。何んとなれば、それは、主權分立の結果としてフランスの國内商業に課せられた拘束を脫する手段であつたからである。

かくして開始された産業的勞働の指揮者と貴族との鬪爭は、二百年以上も繼續した後、遂にルイ十四世の治世に至つて、産業者階級の勝利に歸した。

「成程、ルイ十四世は極めて浪費者であつた。彼は極めて戰爭を好愛した。然し、その事實から、彼が産業者階級のために大なる貢獻を與へなかつたと、結論するのは正當でない。彼の指圖によつて、コルベールは、工業者に大工場建設の資金を與へたのである」

最後に、第四期、即ちルイ十四世の治世より信用制度の確立に到る迄、産業者階級は如何なる發展をなしたか。

サン・シモンは答へて曰く、

「十八世紀以前に於いては、農民、製造業者及商人は、尙別々の團結を結んだ。ルイ十四世の治世

の末年に至つて始めて、此等産業の三部門の産業者は、一切の産業者階級の一般的利益と完全に調和する、特殊の利益を有する新産業部門の建設によつて、財政的にも、政治的にも團結するに至つた。此新産業部門の構成は信用制度を移入す可き手段を産業者階級に供與した。」

かくして、銀行業は、産業當事者が直接に金錢授取を行ふの、莫大な不便を省除した。

「銀行の建設の産業及社會に對する一般的結果は、即ち、奢侈品の量、並にそれに對する趣味が、著しく增加した事、及び、産業者階級は此時以來、他の一切の階級の力以上、否、政府の力以上の金權を掌握し始めた事である。」（註二三）

かくの如く、サン・シモンは、フランスの歴史を、産業者階級と有閑階級、殊に大地主、換言すれば非産業者階級との階級闘爭の、一聯の歴史に外ならぬと見たのである。この研究は、以上によつて察せられるが如く、只フランスの歴史に就いて、甚だ粗雜な考察を加へたに過ぎないが、階級の形成及び階級の闘爭の歴史によつて、政治的變動を説明せんとするものであるから、その唯物史觀の見地には大いに注目すべき價値がある。

この産業の動的考察は、前述した經濟學による彼の靜的考察と相俟つて、階級闘爭史論上に於けるサン・シモンの地位をして、マルクスに甚だ近からしめたものと言はねばならぬ。

六、政權より排除されたる産業者――政府は中間階級に――サン・シモンの中間階級批判

然らばサン・シモンによつてかくの如く、その優越を、過去及び現在に亘つて實證された産業者は、當時政治に參加して居つたかと云ふに、その答は否定であつた。

産業者階級は、尙、依然として、政治的には被支配階級に止つてゐた。即ち、「かくして産業者が能力に於いて、意義に於いて、實力に於いて大なる進歩を成就した間に、非産業者階級は總ゆる點に於いて退嬰した。之れあるに拘らず、國王は、依然として、公共的事務の指揮者をば非産業者階級から選出してゐる。」

換言すれば、「政府は、フランク人の後裔の手中に止つてゐる。フランク人の後裔が、國家財政を管理し、フランク人の後裔が、祖先から繼承した指揮權を掌握してゐる。於是、今日の社會は異常の現象を呈してゐる。國民は、其本質に於いては産業的であるが、其政府は、本質的に封建的である。」（註二四）

然らば、現在フランスの政權を掌握してゐるものは、如何なる階級であるか。

サン・シモンによれば、それは中間階級である。

この中間階級は三階級の合流である。一は法律家であり、二は軍人であり、最後のものは生産に自ら從事せざる有産者、即ちブルジョアである。この中、其數に於て他のものに勝り、「一切の政治的活動を指導するものは法律家であつた。」

彼等は如何にして政權を獲得したかと云ふのに、この三分子は、共同によつて、經濟的權力を喪失しながらも尙政權を保持して居つた封建的貴族階級を倒したのである。即ち、彼等は「フランク人の後裔によつて運用せられた政權を、剝奪する迄に有力となつたと考へた時、國民の大衆に命じ

て貴族に反抗せしめた。國民の力を藉りて一部フランク人の後裔を殺害し、然らざるものは之を國外に放逐して、第一階級に上つた。」

從つてかくして政權を得た中間階級は決して産業者階級でない。彼等が新社會の目的である産業體系の樹立に副ふの不可能な事は明白である。

「彼等は、その仲間から一市民を選出して、之を國王となし、又、革命に於いて主役を演じた同僚に、公、侯、伯、子、男等の稱號を與へた、――一言にして云へば、封建制度を自己の利益のために復活したのである。

この結果は、サン・シモンの求むるところに全く相反してゐる。何故かなれば、樹立されうる最も完全な平等の制度に於いては、實證科學、藝術、技術、又産業に於いて、最優秀な才能を示す人々を第一位の社會的地位に置き、公共の指揮權を與へ、從つて偶然の事由によつて生ずる一切の特權は根絶され、最早永久に生産され得ないのであるからである。（註二五）

於茲、サン・シモンは、これら非産業的政府の支持する意見、即ちブルジョア及法律家の支持する意見に極めて嚴格な批評を下さざるを得なかつた。

彼は、先づ、彼等の形而上學的知識を斥けた。

形而上學は、一七八九年迄はフランスに一大貢献を與へた。それが、フランス文化の進展に對して、多大の寄與をした事は事實である。形而上學者が組織した庶出の支離滅裂な學説は、貴族僧侶に對して一つの城砦をつくつた。この城廓の庇護によつて、産業家並に實驗科學の研究に專心して居つた學者は、完全に研究し、勞働する事が出來た。故に、産業並に實證科學が、貴族に對し、又、僧侶に對して、爭ひうる丈の力を得たのは、一つにこの城砦の庇護によるものであつた。即ち、形而上學者の庇護の下に、一方、實證科學に專心した學者は、僧侶のそれに優る實證智識と、神的道德原理を實行する能力を得、他方、産業者は、彼等の勞働によつて、貴族のそれに優る莫大な富と、人民に及す最大の實勢力とを得る事が出來た。そして、結局、一つの革命をして不可避なものならしめたのである。

然し、彼等は、これ以上社會の進歩に干渉すべきでなかつた。何んとなれば、これ丈の貢献で形而上學説の職能は、なすべき丈をし盡してゐたからである。一言にして云へば、破壞は完成されたのである。

然るに、彼等は尙革命の進行に介在しやうとした。革命を指圖しやうとさへした。そして、その干渉の結果、革命の成果の實現を遲くし、それ丈貴族僧侶の存在を長びかせた。

故にサン・シモンは云ふ。

若し、下院が二階級に、即ち、一方では貴族及び行政に從事する公吏、他方では産業者及び産業の進歩に直接貢献する職業に從事してゐる人々のみから成り、裁判官、辯護士及び其他の法律家をそこから除外したものと一時假定しやう。

この場合には、中間に拆衷策を唱へるものがないから、二派の間には卒直な、そして實證的な議論が、必らず鬪はされるであらう。「この議論の目的は、國民が、軍人、遊惰なる富者、及び公官吏

の利益を目的として組織されるべきか、寧ろ、生産者のそれに於いて組織されるべきかを、決定する事であらう。」（註二六）しかも、この討論の結果たるや甚だ明白である。國民の大多數は、生産的勞働に從事してゐるから、輿論は必らず生産者に有利な宣言を與へ、且又、王もこの意見を採用する事の自家に有利なるを知るであらう。

然るに、事實はこの假定に反し、形而上學者の介在は、かゝる革命の進行を阻止しつゝある。

次にサン・シモンは、彼等が政治上の目的として主張する自由に對して、烈しい批難を加へてゐる。

サン・シモンは、彼等の主張する自由は、云ふ迄もなく、その形而上學の抽象的な生産物に外ならないと考へた。そこで、彼は、この政治目的を蔑視して、人は自由ならんがために結合するのではないと云ふ。若し、そのためであるなら、人は相互に孤立のまゝで居れば充分である。人は狩獵、戰爭及び或る特定の仕事のために結合するのである。自由は、實を云へば目的でも手段でもなく、一つの效果である。故に、自由を主眼とする自由主義派は、社會的活動の目標が何んであるかを、考察しない點を其特質とするものであるとも、云ふ事が出來る。

しかのみならず、分業の大なる發展が、人々が個人的に相互に依存することを、益々少からしめ、反對に、集團現象に依存することを、益〻大ならしめてゐる今日に於いては、個人的自由に基く社會組織、各人に任意的な行動を許す社會組織は、個人に於ける團體の作用を妨害して個人を孤立に導くであらう。

かくしてサン・シモンが自由派と分離した所以は、亦、彼をして、經濟學派の自由主義とも袂を分たしめたのである。彼は云ふ

「世人は、よつて以つて、社會の繁榮に貢献しうると彼等が自任して居つた、殆んどすべての方法が、彼等に損害を與へるより外に、何等實際的效果をもたなかつた事を認めた。そして、世人はこの事實から、社會の幸福のために政府が盡しうる最善は、それに立入らないでゐることであると云ふ諺を引出した。然し、現在の政治組織についてのみ、それを考究する時に正當であるこの見解は、我々がそれを絶對的意味に於いて採用した時には、明白に謬である。それは我々が他の政治組織の觀念に上らない限りにのみ、しかく永續しうる。」と（註二七）

スミス一派が、生産と自由を主張するに對しサン・シモンは生産と團結を主張して、最良の社會組織の完成た志したのである。

即ち、善良なる社會制度とは、諸勢力が分散して居るのではなく、社會的に有用な仕事を達成するために諸勢力が、强固に相結合して居ると云ふところに存する。換言すれば、我々が、自然に對しより有力であり、又より多く働きかける手段を持つに隨つて、それ丈自由な譯である。

この自由說は「産業體系」の中に仄めかされてゐるのだが、これは頗る重要なものである。ジャネーによれば「これのみによつて、既に純然たる社會主義理論である。」何んとなれば、社會主義にとつては、自由は行動權に存せずして、行動力に存するのである。行動の手段を缺く權利は、宛かも支拂不能者に對する債權の如く、一つの名目上の能力であり、空虛なる名義である。何等の行動の手段も、何等の勞働の方便も、それ等は悉く他人の掌中に存し、自ら之を有たぬ人は自由人でな

いからである。（註二八）

思ふに、眞の自由は、個人的自由の如く、只行動の可能性を保證するに過ぎないものでは、到底獲得され得ない。物質的精神的諸勢力が、社會全體の爲に有益な發達をなすことによつてのみ、產出されるものである。而して、右の如き必然的要求を充たし得るものこそ、サン・シモンの主張する科學的產業的體系であつた。

最後に、法律家は、立法を以つて、社會の基礎とする謬見を抱いてゐる。サン・シモンは、之れに對して、立法は目的でなく、たゞ一つの手段である、換言すれば、政治的構成は、決して、社會組織の基礎でなく、只一つの二次的構成物に過ぎないと云ふ確信を有して居つた。

即ち、彼は、大革命以來、フランスに於いて、二十五六年の間に憲法は十回も改定され、或は、十種の憲法が發布されたが、しかも、それによつて、社會的生活狀態が何等根本的改變をなしてゐないことに注目し、此處に、彼は國家と社會との間に存する本質的差別を察知したのである。

彼は云ふ、「吾人は政治形態をあまりに重要視してゐる、――權能及び政治形態を規定する法律は、財產權及び其行使を規定する法律程重要なものでなく、又國民の幸福に、左程重大な影響を及すものでない。――議會政治の形態は、只、一つの形式に過ぎない。財產が中核である。かくて、眞に社會組織の基礎、或は地盤をなすものは、財產の確立である」と。

法律家の政治的優越は、現在のフランスが有する社會的害惡の一つであると云ふ理由を、サン・シモンは、こゝに發見してゐる。（註二九）

然し、彼は、議會政治を全く斥けてはゐない。彼は議會制度を、「神學的體系から地上的實證的體系への推移」「專斷的制度から自由產業制度への推移」に於いて、採用さるべき便利なる仲間制度であると考へて居つた。

過去の殘壘は、新制度が可能なるべく、尙餘りに無數に存在してゐる。そこで、この推移の道程として、「古代制度が最少の不便をもつ組織方法を採用しなければならぬ。」これが即ち議會制度である。

サン・シモンの議會制度觀は、次の如くである。

社會組織の不統一の中にあつて、政治の新一般原則が被治者によつて樹立された。治者は社會の行政者に過ぎぬ事、彼等は被治者の利益に、又意志に一致する樣に、社會を指導しなければならぬといふこと、「一言にして云へば、國民の幸福が社會組織の唯一にして絕對的な目的である」といふのがそれであつた。

この原則は、治者によつても採用された。或は少くとも、古い原則と抗爭し續けてゐる人々によつては、既に承認されて居つた。又、事實に於いて、我々はこの新政治原則が樹立されてゐるものと考へ得られる。何んとなれば、三つの議會權力の中の一つである下院は、憲法の定めによつてこの原則を保護し、且有效ならしめてゐるからである。故に、サン・シモンは云ふ「この原則の樹立は、疑もなく、新政治組織に向つての、全く重要な一歩である」と。（註三〇）

然し、彼は同時に、この議會制度は、人々が妄賞する程のものでないと云ふことを知つて居つた。

何んとなれば、この新原則は、議會制度によつて承認されてゐるに拘らず、現在では何等重要な效果を社會に與へて居らぬからである。それは指導的原理としてではなく、單に、修正原理として、承認されてゐるに過ぎないからである。法典の目的とするところは軍事的制度と産業制度を融合しやうと企てるにある。故にサン・シモンは云ふ、法典は何物をも救ひ得ない、それは豫備的の一良策であると。

橋をつくらんとする技師は、橋杭を建てることによつて始める。古代制度から、新制度へ通ずる橋を支持するに適した一堤防と云ふ意味に於いて、法典を尊重しなければならぬ（註三一）

それが社會秩序を維持する以上、我々は無意味に之れを破壞することは許されない。法典の破壞は、生産者に大なる損害を與へると共に、王族に對しても、醫やし難い不幸を惹起するであらう。秩序の破壞は、政治上の意見如何に拘ちず、善良な人々にとつては一切の不幸の中の最大なるものであり、不道德の人々にとつては、其宗教の如何に拘らず、常に彼等の希望し、且希望するであらうと推定される社會狀態である。我々は法典を尊重すると共に、其過渡的職能を遂行し得る樣に努力しなければならぬ。

即ち「生産者、國民の貴重なる團體を構成し、一方では學者、藝術家、及技術家、他方では農耕者、製造業者及商人、は未だ決して政治的活動に入つてゐないが、彼等の仲裁のみが、王及び國民を脅威しつゝある不幸から彼等を保護する事が出來るのである」（註三二）と云ふ事實を察知して、かゝる文化狀態に適合した社會制度の完成のために努力することを、忘れてはならない。

憲法と議會制度、これは新社會制度への主要なる一歩ではあるが、新社會秩序への出發點や基礎となりうるには尙あまりに漠然たるものを含んでゐる。我々はそれを完成するために勞働を基調とする産業者階級の活動に期待するところがなければならぬ。これがサン・シモンの意見であつた。

我々は、彼のこの見解が、一八一四年の歐洲社會改造論に於けるそれと、ある相違を示してゐるのを發見する。

蓋し、一八一四年のサン・シモンは、議會制度を基準とし、これを國際化し、人類社會の平和を確立すべきであると說いたのであるが、之れに對し、一八一七年以後のサン・シモンは、議會制度は社會の平和には貢獻するが、それを指導しうるものではない。そこには尙幾多の原則的漠然さがある。その漠然さを除去し、これを指導原理たらしめるには、これを實證化しなければならぬ。これを實證化するには、新社會の指導原理たるべきものを實際に知悉し、遂行しうるものに政權を委ねねばならぬと云ふ、一般の思想的躍進を示したのである。故に、我々は、一八一七年以後を、彼の産業研究時代と名づけることが出來る。

かくの如く産業的實證的傾向に一致しないこれら三つの主要な謬見を支持する一時的な政府に、サン・シモンが其退位を要求したのは當然である。

七、産業制度樹立の豫備條件

かくの如く産業の重要性とそれが政治に參與すべき事は實證されたが、彼の希望する産業制度の實現されるには、尙二つの豫備條件が完成されてゐなければならなかつた。

サン・シモンは云ふ、「道德が實證科學となり得る前に、政治が道德を指南として採用する前に、人類が堅實な社會組織、即ち多數の利益のために直接に結合する前に、二つの主要條件が果されるべきであつた」と(註三三)

この二條件とは、一つは人智の實證化であり、他の一つは、國民大多數の能力の高度化である。

「一切の社會制度は一哲學體系の適用であること、從つて、それに適應すべき新哲學體系が豫め樹立されなければ、新制度の樹立は不可能である」といふ事實は歷史の教示するところである。一七八九年の暴動の原因の如きも、當時の哲學概念の曖昧さによるのでなくて何んであるか。

サン・シモンによれば新社會組織の基礎たるべきものは實證哲學である。「文化狀態に比例した一哲學的理論の必要は、今日社會團體の最大の欲求、すべての思索的頭腦によつて最も强く感ぜられてゐる欲求である。」

第一條件を完成するためには、この實證哲學を完成しなければならぬ。そのためには、人間の想像が平穩になり、珍奇の趣味が減少し、形而上學が社會から信用の大部分を失ふこと、換言すれば、實證的智識が多くの進步を見、且理性が多大の力を獲得し、人間の運命を改良するためには、信仰や祈禱や宗教上の儀禮に心を配るより、寧ろ、科學的研究について、又工業上の研究について、遙かに熱心であることが必要である。

然るに、この第一の條件は、今日では、フランスに於いても、又全歐洲に於いても、完全に遂行されてゐる。それは、先づ、國家の主腦部たる王公によつて遂行された。何んとなれば、歐洲列强は神聖同盟をつくり、宗教各派の僧侶及教主の權威を彼等の下位に下らしめた。そして、この事實は、社會組織を完成するためには、神學的權力や僧侶の權力よりも實證的方策に、彼等がより多くの信頼を有してゐることを證明してゐるからである。

國民の意向は、この點については更に强く表明されてゐる。僧侶が、說教によつて信者の注意を喚起しやうと努めてゐるに對して、國民の大多數たる產業者は、勞働を提唱し、科學によつて、社會の幸福に貢獻せんとしてゐるのがそれである。

第二の條件は、國民の多數、即ち、勞働者の最大多數が、自ら自己の職責を指導するに足る丈の能力を得なければならぬといふことである。換言すれば、彼等が社會の第一階級の中に參加することを許される程度の、教養に迄到着してゐなければならないのである。(註三四)

サン・シモンは、產業的國民を二大分類した。其一つは農業勞働に從事してゐるもの、他は製造業者及商人によつて、使用されてゐるものである。

この中、前者、即ち耕作に從事してゐる勞働者は、フランス革命の時に行はれた國有土地の賣却に於いて、彼等の實務的能力の卓越した事に對しての疑ふべからざる證據を提供した。即ち、多數の愚直な日傭人は、急速に土地所有者となつた。そして彼等の大部分は、始めから多大の利發さと智識とを以つて、この財產を管理したのである。(註三五) 例へば、Cateau-Cambrésis と名づける一つの州の住民は、不動產については全くの無產者であつた。然るに、この州の土地が賣りに出た時、彼等は一致してこの土地の共同入札者となつた。かくして、買入れた土地を分配した結果、大多數

の住民は、無産者階級から急激に有産者階級へ移ることが出來た。しかも、この新らしい土地所有者は、其土地の收穫を未だ嘗つてこれを見ない程の額に上らせることによつて、彼等が土地管理に關しても、非凡なる才能を有することを實證した。

次に後者、即ち商工業勞働者は如何と云ふに、彼等も亦、其實力の莫大なることを社會に示した。革命の當初、商工業の企業家は、大部分、革命的騷亂から生じた奪掠のために衰微した。この奪掠を免れ得たものも、最高價格制定の法律によつて壓縮された。幸ひ、これら二つの産業的危機から逃れることの出來た人々も、徵發と英國商品の燒却とによつて、彼等の財産が取上られる苦痛を味つた。故に、若し、製造業者及び商人によつて使用されて居つた勞働者の大多數が、この不幸によつて滅亡し、精神的に壓倒されて了つたならば、或は、若し、これらの勞働者の大多數が、それを受繼ぐに充分な能力を有してゐなかつたならば、かくの如き不幸の結果として何が起つたであらうか。「一言にして云へば、生産はフランスに於いて減少したであらう。」（註三六）然るに、事實はこれに反し、一切の生産は、それ以來、殊に、革命の不幸の時代に於いてすら無限に增加して居つた。

單なる勞働者として商工業に從事して居つた人々は、彼等の事業の指揮者となり、其先進者よりも智識と活動に於いて、遙かに彼等の有能さを示したのである。故に今日に於けるフランスの産業は、農業或は商工業の何れに於いても、革命前のフランスよりも、遙かに勝れた繁榮を示してゐると云ふことが出來る。

以上の事實は、最も實證的有效さを有つ勞働に對する能力が、國民の多數の中に擴つてゐるといふこと、又、財産の管理能力は、出生の偶然が有産者の位置に置いた人々よりも、同樣に出生の偶然のために無産者の階級に編入された人々によつて、今日一般により多く所有されてゐることを立證するものであつた。

サン・シモンは云ふ

「國民の大多數が、直接に公共の幸福を目的とする社會組織を、公共の平安に對して何等の不便なく、フランスに樹立するに充分な智力の發展に到着してゐることを、これ以上有力に、又これ以上完全に、示してゐる證據はありうるか」と（註三七）

八、新制度樹立の平和的方法—輿論の獲得—財務行政權の委託

今迄述べて來たところを綜合すると、次の如くになる。

「社會全體は産業に基礎を置く。産業は、社會の存在の唯一の保證、一切の富と一切の繁榮との唯一の源泉である。故に、産業に最も有利な社會秩序は、それ丈によつて、社會に最も有利なものである。こゝに、全く、我々の努力の目的と出發點とがある」（註三八）しかも、その産業者はこの理論に相應した實際的力を現在保有してゐる。

これが今迄の理論の要約である。

然るに、前述した如く、政權は、尙、遊惰無爲なる貴族及び僧侶、又は、事物の效果である立法を目的であると誤認してゐる立法家の手に、掌握されてゐる。

サン・シモンは、この現狀に對して、如何なる方法によつて、政權を産業者の手に讓らしめんとし

たか。

政權の讓渡は、普通二つの道によつてしか行はれない。一は平和裡の讓渡、他は暴力による奪取、即ち革命である。

サン・シモンは、これについて次の如き問を自ら發してゐる。

「暴力手段を用ふる事なくして、社會の財政的利益の最高執行權を、貴族、法律家、地主、一言にして云へば、非産業者階級の手から奪ひ、之れを産業者の手に移すことは可能であるか」と

彼は暴力革命には左袒しない。曰く

「暴力の方法は、破壞のためには、顚覆のためには有效であるが、只それ丈に有效であるにすぎない。建設するためには、換言すれば、堅實な組織を樹立するためには、平和的方法をのみ用ふべきである」と（註三九）

又、次の如き自問自答をも試みてゐる。

「特に權力と尊敬とが與へられてゐる階級は、彼等が享有してゐる利益を自發的に廢止する意思を確かに持たないから、この問答に於いて、君は一揆か暴動を說くのか。

「一揆や暴動を說くどころか、我々は、社會が脅威されるだらう暴力手段を防ぐ唯一の手段を示すだらう。若し、産業者の勢力が、權力が論ぜられてゐる暴亂に際して、受動的のものにすぎなかつたならば、社會はその暴力的行爲を防ぎ得ないであらう」と（註四〇）、

然らば、この平和的方法とは何かと云ふに、彼によれば、それは討議、論證、說服等の方法によつて、國務の最高執行權を、軍人、法律家、地主、官吏の手から奪ひ、之れを最も傑出した産業者の手に委託することである。

就中、國家の財政的事項に關する最高指揮權を、重要なる産業者に與へることは、新社會組織の基礎となり、且革命を終結せしめるに必要なものである。

何故に彼等に財政的指揮權が委託されねばならぬかと云ふのに、彼等なくしては、當時の財政的窮迫を救濟し得ないからであつた。

この事についてはサン・シモンは次の如く考へた。

一七八九年以前には、國民は三階級に分れて居つた。即ち、貴族、ブルジョア及産業者である。貴族が支配し、ブルジョア及び産業者が其支配を受けた。然るに、一七八九年以後は、國民は二階級に分れた。即ち、革命を遂行したブルジョアは、公收入を搾取した貴族の排他的特權を廢止し、それを自己の利益のために使用した。ブルジョアが政權に加入した結果、産業者のみが、貴族とブルジョアの支配下におかれる樣になつたからである。

この結果、革命前に五億を支拂つて居つた國民の負擔は十億に增加した。そして、それでも尙充分ではない。貴族とブルジョアの政府は、屢〻莫大な借入をしてゐる。この增加した負擔はすべて勤勉な産業者を押壓さうとしてゐる。

この事は勿論、公共の靜安を脅すことが甚だしい。故にかく增加して行く負擔を防ぐ唯一の方法は、經濟を宗とする産業者に、國家の財政事項を司る重要な職務を與へ、國家の財政を濫費して自

己の利を計る有閑者を斥けるにある。と

加之、産業者は、平和の裡にこの職責を果すことを好むと云ふ善良な性格を有してゐる。サン・シモンは、産業者が平和主義者であることに特に注目してゐる。曰く「彼等が革命の間に保持した態度を研究するならば、我々は、彼等が必らず平和的であることを認めるであらう。革命を遂行したものは決して産業者でない。それはブルジョアである。即ち貴族でない軍人、平民であつた立法家、特權をもたぬ金利衣食者であつた」と。（註四一）

サン・シモンは、極力、暴力手段を回避するものであつたのである。

然らば、これを如何にして實行するか。

最初に、輿論の味方を得なければならなかつた。産業者の討議と説服によつて、輿論が一度、産業制度に賛意を表明するならば、議會はこの説に傾き、王も亦之れに從つて、豫算編成の重任を産業者に與へるであらう。

彼は輿論を尊重することに於いて、議會制度の存在と活動の理由を、充分に見出してゐるのである。

この輿論獲得に際しては、烈しい論戰の戰はれることを豫期しなければならぬ。著述家は第一戰に立つて戰ふであらう。古代制度の擁護者との論戰、又、立法家及形而上學者との論戰が行はれねばならぬ。

この論戰に於いて産業者は當然勝利者となるであらう。理由は明白である。國民の大多數が産業者であるから。

然し、産業者は、最良の公法學者の協力を確保することによつて、明白に利益を享けることが出來る。彼等は今日まで政府の擁護によつて其生活方法を得て居つたのであるから、自發的寄附によつて、この收入を補償してやらねばならぬ。

産業者と公法學者とは、産業制度樹立のために、二つの委員會をつくるだらう。其一つは、公法學者から成り、出版するに足る著作を選擇する。他の一つは産業者によつて組織せられる。彼等はこの團體の基金をつくり、第一の委員會によつて提出された著作に、出版する許可を與へるだらう。この結果、たつた一つしかない産業者派の機關紙――これは恐らくサン・シモン自身の著作を云ふのであらう――が有力なものとなるであらう。この結果、サン・シモンの希望するところの「有閑的有産者から一切の尊敬を奪つて、これを罰する樣に輿論が進められる」ことにならねばならぬのである。（註四二）

九、産業制度の特質―生産者の優越と政府の權力の減少

かくして輿論の支持を得た後、産業制度は如何なる組織によつて構成されるか。

我々は、この新制度に於いて、他の制度と異なる二つの主要な特長を發見する。

一は産業者の社會的優越であり、他は國家の保有する權力の減少である。

産業及産業者の重要性については既述したところで明らかであるから第一の特長については述べることを止め、第二の特長について述べて見やう。

産業制度に於いては政府の權限は如何なる變化をうけるか。

「社會組織の機能は、大多數を構成してゐる個人が、彼等の仕事を管理し得ない程無智と不先見の狀態にある限りは、必然に甚だ複雜したものであつた。」そして、彼等は、あらゆる、不秩序に彼等を導く野蠻な感情に動かされ易かつた。こゝに於いて、かゝる事情の下では、少數者が軍事制度を組織し、立法權を專ら自己の手に收め、國民に對して强壓を强ひるために必要な法律を制定しなければならなかつた。（註四三）

そこで、治者の意識に上る國家は、今日まで、彼等が繼承した遺產としてであつた。遺產と考へられる以上、彼等は常にこの財產を搾取するか、或は擴張するかの、何れか一つを目的としてこの對象に活きかけた。從つて、一見被治者に利益であるかの如く見へる後者の場合も、治者は自己の財產をより生產的にし、或はより堅實なるものにすると云ふ意識以外に、何も考へて居なかつたのである。治者のこの觀念は、國民によつても亦暗默の裡に是認せられ、それから生じた利得を、治者の本務の然らしめたものとは考へずに、治者の利得であると考へたのである。貴族が王の名によつて自己を利したのは、かゝる經過によつたのである。

然し、この狀態は今日まで、變化を蒙ることなしに持續してはゐない。この狀態は人智の進步によつて少からぬ變化を受けてゐる。治者の行爲は、今日に於いては、其自由と其範圍とを大いに狹少された。

然し、最も遺憾とするところは、それらの變化が形式上の變化に止つて、本質的には尙舊のまゝであることである。

サン・シモンは云ふ、「王は、神權によつて彼の人民の所有者であると云ふ古代の原則は、今尙依然として、少くとも理論に於いては、根本原則として認められてゐる。それを拒否する企が、悉く、社會秩序への暴行として法律によつて取扱はれてゐるのは、その證據である」と（註四四）

從つて、智慮あり、且慧敏なルイ十八世すらも、新らしい時代の要求を了解しながらも、實證的智識を缺くがために、彼の敎育から來る僻見の影響を全く避け得なかつた。のみならず、同樣な僻見に養はれて來た彼の大臣等も、彼を正道に導くことをし得ず、依然として、彼に治者の傳統的誤謬を犯さしめてゐる。

要之、今日迄有能を示した政府が――あらゆる形式の政府の唯一の機能は、常に暴力と詐術の合成物に還元することが出來る――社會を繁榮ならしめたと自ら號したものは、すべて暴力と詐術によつて行つたものであつた。（註四五）

然し、これは輿論の存在しないところから起る當然の結果でもあつたのである。

少し思慮ある人ならば、社會が、其繁榮の普遍的方法について確定した思想を有しないで、社會を幸福にすることを爲政者に漠然と命令するに止まる限りは、專斷が、普遍的形式によつて、常に社會を統治するに至ると云ふ事を、容易に看取するであらう。

かゝる場合には、國民は完全に統治者の意思通りに左右される。若し、王が野心家であれば、彼は國民を征服するがために、適した如く組織するであらう。若し饗應の趣味を彼が有してゐるなら

ば、國民を幸福ならしめやうとして、美麗なる宮殿を造營し、壯大なる饗宴を國民に與へるであらう。我々は、慈善を勸告したマントノン夫人に對するルイ十四世の答を回想して見なければならぬ。「多く費すことに於いて、余は慈善を施してゐる」と。これがルイ十四世の言葉ではなかつたか。

故に輿論の確立は、社會の幸福にとつて誠に必要である。サン・シモンが、新社會組織の樹立のために、輿論の味方を得んことを最初の手段としたのは、このためである。

今、産業者階級が、輿論を獲得して國家の財政行政を掌るに至れば、從來のこの統治形態は當然大なる變化を蒙らねばならぬ。産業者階級が國家財政の衝に當ることは、即ち、科學的經濟的社會力が、出生權や宗教權力に置換されたことを意味する。それは新制度に肝要なものが、政治或は統治の形態でなく、行政能力であることを指してゐる。社會的事實の規制は依然として行はれなければならぬが、一階級による他の階級の支配が全然癈止されることを意味してゐる。人間が人間を支配することは止められ、人間が財物を管理する、それが政治であると云ふ原則が、人々に是認せられることを意味してゐる。

又既述した如く、社會の幸福は最大限の智識と最大限の物資を享有するにあるが故に、産業者階級を中心とする新政治組織に於いては、「科學、藝術、技術に關する既得智識を人間の欲望を滿足させる樣に可及的に最もよく利用すること、此知識を擴大、完成し、且增加せしめること、一言にして云へば、科學、藝術、技術に關する個別研究をすべて、出來る丈有益に結合することを唯一にして、永久な社會組織の目的としてもたねばならぬ」（註四六）

そして、この目的を達成するために最大限に農工商の仕事が奬勵されるであらう。

從つてこの事は、直ちに産業者階級の編成する國家の豫算に現はれるべきである。即ち「國民大多數の精神的物質的改良を行ふために最も直接な方法は、其物質的存在を確保するために、壯健な人にすべて勞働を得させるための必要な費用、既得された實證的知識を可及的に最も迅速に無産者階級に普及させることを目的とした費用、そして、最後に、この階級を構成してゐる人々に、彼等の知識を發展せしめるに適した快樂を保證しうる費用を、國家の第一の費用として分類するにある」

この豫算からは、舊制度の豫算に計上されて居つた不生産的出費は當然削除されるか、或は甚だしく減額されるであらう。

例へば、額の大なる程多數の遊惰者を抱擁する王室費の如きがそれである。

かくの如く、歳出のすべてが國家の生産的事業に充てられ、各階級がすべて合理的に其欲望を滿足する樣に組織せられるから、この制度に於いては、最早一揆の恐るべきものは起り得ないであらう。

從つて、それに對抗すべき多數の常備軍を維持する必要も最早なくなるであらう。警察局のために莫大な金額を支出する必要もなくなるであらう。

國内のみならず、國外に於いても、何等恐るべき脅威は存しなくなるであらう。何んとなれば如何なる王侯も、國民も、彼等の怒を招くことをしない幸福な三千萬の人々から構成されてゐる平和

な國民を攻擊しやうと云ふが如き奢侈はしないであらう。それのみならず、聯合の利益を察して、反つて共同を申込むからである。又、たとへ、他國がフランス攻略を企てたとするならば、フランス三千萬の人々は敢然としてこの攻擊を斥けるであらうから。（註四七）

秩序維持と云ふ仕事は、從つて、この新制度に於いては、到底、第一次的職務たり得ない。

サン・シモン曰く、「秩序維持を特に其目的とする職分は、其自然的順位によつて、即ち、從屬的警察的職分としてしか、新社會組織に於いて最早分類されないであらう。何故なれば、秩序維持は團體が目的を有してゐない限りに於いてのみ、重要な職分たりうるものだといふ事が明白であるからである」

「この事から、政治家の行爲は、其時には出來る大制限されるだらうと云ふ結論を生ずる。故に、人々はかゝる社會狀態に於いては、社會狀態と適合する最高限度の自由を享有するであらう。秩序維持の職分も、其時には殆んど全體に於いて、或は爭亂者を抑壓し、或は討論を決定するための、全市民共通の職分となるであらうといふ事にも又注意しなければならぬ。

「若し、政治組織が、明白に社會の繁榮を目的としない時には、秩序維持のために甚だ大なる仕掛を有する政府が必要である。何んとなれば、其時、人々は民衆を既設組織の敵と考へることを餘儀なくされるからである。然し、各人がそれ〴〵進むべき目的、及びそれに近づく繼續的進歩を眞に了解する時には、人民の多數は、反社會的少數者を制禦するためには殆んどそれ丈で充分な一消極的勢力を振ふ」と（註四八）

蓋し秩序維持の職分が、文化の進展につれて第二次職分の地位に下ることは、當然な歸結である。社會は個人から成る。社會の知識の發展は、從つて、より大なる階梯に個人の知識が向上したことを示すに過ぎない。今、個人の教育階梯を觀察するのに、我々は、小學校に於いて統治行爲が最も強いのを認める。學校が高等化するにつれて、兒童を統禦する行爲は常に其强度を減じ、それに對して訓育が增々重要さを加へる。

社會が個人から成る以上、この事實は、同樣に社會全體から考察しても眞理である。軍事制度、即ち、封建制度は其當初甚だ强大でなければならぬ。然し、社會の進歩につれて、それは次第に其力を減少すべきであつた。そして行政的行爲が次第に重要さを獲得すべきであつた。最後に、必らず、行政的權力が軍事的權力を支配する時代が到來しなければならなかつた。

サン・シモンはこれを實例によつて證明しやうとしてゐる。

工藝大學校は、嘗つて組織された中で最も高級な教育機關である。これを建設する議の起つた時、其創設者等は、一方に最も多くの知識を、そして最も重要な知識を、出來る丈短期間で、又他方、教育の職能を最も有能な人々に授與せしめると云ふ、適切な教育設備をつくるに專心した。彼等は、この二條件が遂行されゝば、自分等の仕事は完成したものと考へたが、この設備には尙一種の行政事務の必要を知つて、この次序的職務を各教授に分擔せしめた。然し、教育から最大量の效力を得るためには、獨立に秩序維持の職務を豫定の人に附與するの有利なのを知つて、この職務を官吏に委任した。これら官吏には、教授となる知識、能力、をもたぬものが任命された。何故なれば、其

職務自體が次序的のものであるからである。

然るにナポレオンは、この組織が一見甚だ簡單なのを見て、彼一個の獨斷から之れを改正して、それに或る威嚴を與へやうとした。そこで彼は總長、副總長、理事等の職制をつくつた。このため、全く有閑無爲の人が、今迄この器關の第一位を占め最高の尊敬を得て居つた教授を全然壓倒し去つて了つた。學校に於ける眞の職務が第二位に下り、次序的職務が首腦部に上つた。

此制度は今尙存續してゐるが、從前以上の冗費を要し、最高價で且最も無用な官吏によつて運用されてゐる。

要之、既述したところを約言すと、「一切の最大なる政治的利益を得るために提議せられる改造方法は出來る丈少く、且つ出來る丈廉く治めると云ふことである」（註四九）

社會にとつて最も有用な仕事は、他の何物に比しても遙かに僅少の費用しか要しない。しかも、この政治費用の節約こそ、社會各員の常に仰望して止まないものである。（註五〇）

洵に、政府萬能主義の撤去は産業新制度の主要なる特質であつた。

政治は生産の科學であると云ふサン・シモンのすぐれた原則も、かくして充分に滿足せしめられるといふべきである。

最後に、産業者階級が新制度に於て行政の樞機を司ると云ふには、彼等の經濟的發展による社會力の所有といふ理由ばかりでなく、本質的に彼等が政治を委託されるに適當してゐるといふ事實の存してゐるがためであることを知らねばならない。

サン・シモンはこれを二つの理由によつて説明してゐる。

第一、公務は、それが學者、藝術家、及技術者によつて支持される場合には、可及的最善の進歩をする樣に管理せられるであらう。何んとなれば、學者、藝術家、技術者は富に對して野心の最も少ない人であるからである。一般に莫大なる財産は、彼等に不可缺なものでは決してないし、又それは、多くの尊敬を受けるには甚だ無益ですらあると云ふ理由によつて、彼等は、彼等の適度の欲望充足に必要な金額しか欲求しない。

共上に、彼等に專ら社會的職務が與へられてゐる場合には、彼等は金錢に對してより淡白であるだらう。何んとなれば、共時に彼等は、尊敬に於いては、最も富める人をも凌駕するからである。

彼等が、他の人に比較して財産獲得欲の少ないと云ふ理由は、尙二つを擧げることが出來る。第一の理由は、彼等の生涯は、殆んど彼等の仕事を完成さすために捧げられるから、自己を富ますために必要な方法に使用する時間は、甚だ僅かしか殘らない。

第二の理由、たとへ莫大な財産を所有し得たとしても、彼等の仕事自體が、これを享樂するに必要な時間を彼等に殘さないからである。

最後に財産には二種別の存することに注意しなければならぬ。

共一つは、政府によつて行はれると、個人によつて行はれるとの如何を問はず、一般に危險なる仕事、即ち、投機から生ずるもの、換言すれば、一種の掠奪行爲の結果として生ずる財産である。

この種の財産は常に個人的享樂を得るがために得られる。眞の學者、藝術家、技術者は決してこの

種の財富の所有者とはならない。

他の一つは、前者と全然異つた使用意圖を以つて獲得されたもので、科學、藝術、技術に關する重要な發見から生れる。そして、これは常に科學、藝術、及技術の完成にのみ使用される。

普通、この種の財産は個人や國民を犧牲にして生じたものでなく、不斷に社會全體の利益に貢献するものである。

第二、若しも彼等に一般行政權が委託せられたならば、彼等は最も少なく社會を治めて行くであらう。

若し、世人にして、人類にとつて有用な仕事、例へば地球の測定を目的とするが如き仕事が如何にして行はれたか、又、フランス及び他の國々に於いて、科學、藝術及技術を完成するために企てられた一切の研究が、如何に指導されたかを觀察するならば、これらの仕事及び研究の指導者が如何に其協力者を支配することの少なかつたかに驚くであらう。（註五一）

學者、藝術家、及技術者を總括した産業者は新制度の爲政者として、其資格、其實力に於いて全く缺くるところはなかつたのである。

十、學者及王の地位―教權と學者―産業者の王

更に學者及び王の此新制度に於ける地位を考へて見やう。

この制度に於いて學者の占むべき地位如何、

サン・シモンは、産業制度に於いて最も重要なる地位を占むるものを、狹義の意味に於ける産業者であると考へた。

曰く「學者は産業者階級に甚だ重要な奉仕を與へる。然し、彼等はより重要な奉仕をそれから受ける。彼等はそれから生存を與へられる。彼等の一切の物質的享樂のみならず、その第一の欲求を充足さすものは、産業者階級である。彼等の研究を實行するために彼等に有用な道具を、一切、彼等に提供するものは、産業者階級である。

「産業者階級は基礎的階級、全社會を扶養する階級である。それなくては他の如何なる階級も存在し得ないであらう云々」と（註五二）

故に、一切の權力は彼等の手に委託さるべきであつた。法律を制定するのは彼等である。他の階級の占むべき地位を決定するのも彼等である。産業者階級は、他の階級が産業に貢献する勤勞を比較して、それに相應した社會的重要性を、各々他の階級に與へるであらう（註五三）

産業者階級は、かくの如く、社會の主權を握るが、彼等の活動範圍は主として人の物質的肉體的幸福に關するものである。從つて、人の幸福の他の一要素である精神的智識的幸福に關する事項は、之れを他の專門家に委託しなければならぬ。

こゝに於いて、サン・シモンは、遠く中世の例を思ひ浮べて、俗權と教權との二權力が存在しなければならぬことを指摘した。中世に於いては、政權は武士階級に、即ち貴族階級に、教權は聖職者即ち僧侶の掌中にあつた。

現在に於いては、政權は法律家に、教權は形而上學的哲學者の手にある。

新制度に於いては、政權は産業者に、教權は當然實證的科學的學者に歸屬しなければならぬと考へた。曰く

「國民の精神的幸福に關するものについては、最も實證的に有用な智識を有する學者に、青年及壯年の人の教育を委託すべきである」と（註五三）

教育制度についてヤ、詳細に亘つて説明すれば、教育に關しては三大教職が定められ、それによつて社會科學の三要素が教へられる。

社會科學の三要素とは、道德、科學、産業である。講座は精神講座と實證科學講座とに分れ、そこで三要素が教授される。

精神講座に於いては、その人の社會的地位如何を論ぜず、各人に個人的利益と全體的利益とを結合する方法を教へる。人は、社會に有害な方面に自己の個人的幸福を求める時に、人が蒙る最大の道德的罪惡を犯してゐるものであること、之れに反して、若し、多數にとつて有益であると明白に感ぜられる方面に於いて、自己の個人的運命の改良を計る場合には、人が達しうる最高の享樂をもつことが出來るものであると教へられる。

實證科學講座に於いては、自然現象を人間にとつて最も有利に利用する一般的方法を教へる。

學者は二つに分かれ、一つは科學學會を構成し、他は道德政治學會を組織する。（註五四）

前者は、既にルイ十四世によつて建設されて居り、其目的とするところは、利益に關する最良の法典を制定するにある。

後者の設立は、前者に比して一層必要なものである。何故なれば、アラビヤ人が數學及觀察科學を研究し初めて以來二千年、道德の研究は益〻等閑視されて居つた結果、斯學に對する我々の智識は、今日、物理學及數學の智識より甚だ遲れてゐるからである。この學會は、道德學者、神學者、法律家のみならず、一流の詩人、畫家、彫刻家によつて組織されねばならぬ。道德家の中に、音樂家畫家等を數えることは不思議の樣に見えるが、今日物理學者數學者の中に光學器械製造者、時計師を數えると同樣に不思議ではない。「理論の製作者は理論應用に於いてすぐれた人々から決して分離すべきでないからである」（註五五）。

次に、王はこの新制度に於いて如何なる地位を占めるべきであらうか。

サン・シモンは、是等の改革計畫をすべて王權の庇護の下に實現せんことを希望した。彼は、生産者が社會の出頭となることを王が承認するのは、王にとつても利益であると説いた。

彼は平和的革命論者であるが故に、常に社會改革を王權と關聯して考へて居つたのである。其眼前には、常に中世の都市及其都市と王權との同盟の追憶を畫き、これと同性質の同盟を、産業者とブルボン王朝との間に求めたのである。

二個の利害關係は兩者を接近せしめるに違ひない。二個の利害關係とは革命と戰爭の恐怖とである。革命を避けるために、王權は産業者の手腕に身を委ねべきであり、戰爭を回避するためには、産業者は自由黨と緊密に結附いてゐる軍閥の誘惑から脱れて、ブルボン王黨に加盟すべきである。故に、サン・シモンは、王に勸めて、王自ら、王國最高の産業者たることを親しく宣布し、此革命を

敕令によつて成就しやうとしたのである。これがサン・シモンの眞意であつたと推定される。

從つて、新制度に於いても、王は依然として最高の權力者たる地位を保持してゐるものと云ふことが出來やう。

洵に、絶對的存在、專制的權力に對する嗜好は常にサン・シモンの心から離れはしなかつた、たとへ、彼が科學的研究に沒頭して居つた時でも、「進歩は、革命か獨裁か、何れか一方法によつてのみ行はれる。然るに、獨裁は革命よりも彼にとつてより望ましいものであつた。」

然し、貴族的神學的制度から産業的科學的制度へ移ると云ふこと、これを獨裁的王權が援助すると云ふこととの間には、兩者の利益の必ずしも一致するものではないと云ふことには注意しなければならぬ。

即ち、産業的實證的制度は、政府萬能主義濫用の防止を目的とし、經濟上の諸原則に常に忠實ならんと努力する制度である。産業者は、彼等の手に豫算編成の大任を得るや否や直ちに、有閑的な貴族を養ふにすぎない王室費に甚だしい削減を加へるであらう。この結果、王威が實際的に可なりの衰退を見ることが其一である。

次に、産業制度は對人政治から對物政治への轉換を示す。前者は意思に基づき、後者は科學的原理に基づく、前者が本質的專制政治であるに對して、後者は合理的な行政制度を意味する。換言すれば權力から能力への移動が問題である。王權は前者を根據とするものであるが故に、このためにも亦、甚だしく其威嚴を減ぜざるを得ないのも矛盾の一つである。この矛盾を極端にまで理論的に押進めて行くならば、恐らく、王權の存在は新制度に於ては一つの形式上のものになるのであらう。

蓋し、サン・シモンの眞意は、産業制度の樹立にあつて、産業的王政の樹立でなかつたのであるから、王は、其存在を承認されて居つたとしても、一の實在と云ふよりは寧ろ一つの假立的存在に過ぎないと云ふ方が正しかつたのである。

この事は、彼は一八一四年以後に於て、前述した如く、産業者の概念を廣く國民全體と同意義に用ひて居つたことから推知出來る。「産業者即ち國民」が一切の支配權を確保すること、これが彼の生活の唯一の關心事であつた。故に王も、彼が産業的價値を有する限りに於いてのみ、サン・シモンの注目する對象となつたのである。例へば商人、重要なる産業勞働者と結んだと云ふ理由で、ルイ十一世はサン・シモンに偉大なる王として賞讃された。又ルイ十四世に於いて、サン・シモンが賞讃したものは、彼の莫大な消費や饗宴、征服ではない、毛織物工業に與へた奬勵、科學學會の創設、産業的勞働を扶助し進展せしめる特種の事業を起したこと等である。つまり、彼はルイ十四世の偉大さを、彼が「實證的科學的能力と製造工業能力を結合させた事實」に認めたのである。

要之、王は偉大なる産業的姿像としてのみサン・シモンの産業制度に於いて其存在を主張し得るものと云はねばならぬ。

遮莫、その存在が形式的にせよ、實質的にせよ、王の登るべき位は確かに殘されて居つた。「産業者各自は、其出發點が如何にあらうとも、國王の地位を除いた外は一切の社會的存在の第一位に達しうるであらう。」

思ふに、彼が王と云ひ、萬有引力と云ひ、或は亦神と云ふ或る統一的存在は、常に彼の體系から除去されるべきものでない。それが、明確な姿によつて表面に現出してゐるとゐないとに拘らず、常に彼の體系の輕からぬ部分を形成してゐることは、彼の著作を讀むもののひとしく感ずるところであらう。この感情が最後に高漲して展開されたものが「新キリスト敎」であつた。我々は、そこで彼の統一的感情が、王よりも更に高度に於いて人格化された神となつて語られてゐるのを見る。

十一　新制度樹立の效果

然らば、産業制度樹立の結果、社會は如何なる進歩を見るであらうか。

産業制度によつて、社會が如何に驚異すべき發展をなすかと云ふことについて、サン・シモンは次の如き言をなしてゐる。曰く

「今日まで人は、いはば純然たる個人的孤立的努力しか自然に及さなかつた。」人は今日まで不同な二部分に分割されて居つた。そしてこの兩者は、支配とそれを拒絶するためとに最大の努力を浪費して來た。然るに、「勢力のこの莫大な損失に拘らず、人は最も文化した國々に於いては、安樂と繁榮の甚だ著しい程度に達して居るといふことは明白である。これによつて考へれば若し殆んど何等の力もこのために失はれることがなかつたならば、若し、人が相互に支配しやうとすることを止めて、結合した力を自然の上に及す樣に組織されて居つたならば、若し諸國民が、彼等の間に同一の憲法を施行して居つたならば、どの程度に人は到着して居つたらうか」と（註五六）。

一社會が莫然たる目的に向つて進むときと實證的目的を定めて進む時とは、そこに如何に甚だしい相違を生ずることであらうか。サン・シモンは云ふ「比喩は我々が提議した原則の重要さを新らしい見地から鮮明にするであらう」

今若し、こゝに一隊商があつて、それが道案内に向つて、最もよきところへ我々を連れて行けと云つたと想像するならば、この時以來隊商は最早何者でもなく、道案内が主たる地位に立つことならう。そして、隊商は道案内に對する無制限の信頼と、全然受動的な服從を是認しなければならなくなるであらう。從つて、道案内の出來心によつて隊商の運命が支配されるであらう。

然るに之れと反對に、其隊商が道案内に向つて、「メッカへの道をお前は知つてゐるであらう、そこへ我々を連れて行け」と云つたとするならば、その時には道案内は最早主位を占めることは出來ない。其職務が如何に重くとも、いやしい一個の道案内にすぎない。主たる支配權は依然として隊商の掌中にあるであらう（註五七）。

産業制度の確立は後者の場合である。社會は、各人の物質的精神的最大量を保障すると云ふ確定した目的に向つて、洋々たる希望と勇氣を以つて隊商の歩を進めて行くことが出來るのである。

而して、この制度は只にフランス一國民に採用されるに止まらぬ。「フランスが模範を示すや否や、そして彼等が追從すべき道を開示するや否や、この改造方法はあらゆる文明國民によつて必らず承認されるであらう」（註五八）。

こゝに、彼の歐洲社會改造論に現れた樂天思想が、再び出現してゐる。

形式政治は歐洲議會によつて、實際政治は産業制度によつて、この二つが相俟つて宇宙は一大工

場化され、萬人は共同して勞働すると云ふ思想が、完成された形を示すものであらう。

十二　結論――サン・シモンの社會主義

サン・シモンの學説は産業を中心とした、一社會組織の研究である。

そこで、彼が力説するものは、萬人に課せられた勞働と協同との二つである。

近世社會の基準たるべき勞働の概念を、彼がこゝで高調した點、彼がそこに注目したことは、確かに彼の偉大さを物語るものと云へやう。

舊來のあらゆる道德律及宗教律は、常に勞働を、一個の人間的義務として人に負擔すべきことを命じた。然し、それを萬人に課することを、敢えてしなかつた。このために、勞働は、疲勞と隷屬を示す一個の墮落した形骸にすぎなくなつた。

サン・シモンは、之れを社會的にし、其本來の面目を回復さすことによつて、勞働を人の子の咒詛から解放したのである。勞働は萬人に差別なく課せられてこそ初めて、尊重すべき社會的義務となる。我々は、我々が消費してゐると云ふ事實から、各自共同の福利のために勞働しなければならぬと結論する事が出來る。

勞働は智であり、善であつて、罪惡ではない。況んや、隷屬の徵表でもない。そこに、新制度の眞理はあると、サン・シモンは叫ぶものである。

然し、彼の勞働の概念には、前述した如く、近世社會主義者のそれの如き、批判と分析が加へられて居ない。彼は勞働の概念によつて、局限された、眞の意味の勞働者を指示せずに、現代に於いては、資本家として勞働者に鋭角的對立をなす分子までを、そこに含め、彼等に社會改良と云ふ甚だ重大な使命の履行を期待したのである。

彼が、屢〻階級闘爭理論の先驅者として、今日指摘せられる程、當時に於いて、有産者と無産者の對立を認識する眼識を有しながら、尙無産者に對して、その生くべき道を示し得なかつたのは、彼を責むるより寧ろ、時代の勢に其根據を求むべきであらう。

工業の勃興は、人間勞力の發展と、其利用を意味する。この勢の前には、資本の所有の有無は問題でなく、若しあつたとしても、それよりも、働くか働かざるかが問題である。社會は働らくものと、働かざるものとの判然たる階級に分割さるべきであつた(註五九)。故に保護すべきものは其働くものの一部たる無産者丈でなく、資本家をもこめた勞働する階級全部である。しかのみならず、この近世的産業の開戰の當初に於いて、尊嚴を示しながら働かずして新社會を支配せんとする舊支配階級に對抗して、敢然として戰ひうるものは、無力なる無産者よりも、當然、有力なる産業的有産者でなければならぬ。

サン・シモンが、新社會の中樞を産業的有産者に置き、無産者に求めなかつたのはこの理由によるのである。

彼が、一方有産者に對して、智識あるが故に彼等が無産者に優れてゐること、無智なるが故に破壞を企てる無産者と協働せよと詰り、他方、無産者に對しては、頭腦と富が、貧と筋肉勞働に優れるが故に有産者を尊敬すべしと説いたのは、一に勞働するものの全社會的協同を、彼が要求したに

外ならないのである。

従つて、彼は、産業の基礎たるべき資本或は財産の尊重すべきこと、重要なることを云ふに吝かでない。

彼によれば、「財産及財産所有者の尊重」の原則、及所有權の自由行使の保證は立法の基礎となるべきものであつた（註六〇）。

従つて、もし求めるならば、ここに於ても、近世社會主義者としての必要條件たる、資本の分解が少しも行はれてゐないのを發見する。

即ち、彼は、安逸者の收益に對しては極端なる攻擊を放つたが、勞働によつて其收益が生じたものであるなら、この利益の多寡について、或はそれが單に先行した勞働に對する報償であるか否か、又は、それが當然として認めうるべき安息の價値であるか否かには毫も顧慮するところがなかつた。否、彼は産業や銀行の主宰者であり、且つ自ら自己の資本のみを有利に運用する人々を、未だかつて、安逸者とは呼ばなかつた。却つて、それと反對に、彼が考案した社會の首位を占むべきものは、常にこれら一流の資本家或は銀行家であつた。つまり、事實上の財閥政治が彼の希望するものであつたと結論することが出來る。

この點に於いて、彼の學說は近世社會主義のそれと、甚だ遠く離れたものである。これら不勞所得（近世的意味に於ける）を生ずべき資本の作用に對する考究、これこそ、我々が、サン・シモンの學說を近世社會主義のそれに等しからしめるために、要求すべき第一のものであらう。

然し、彼は、徒らに、この新興資本主義を禮拜したのではない。これは特に注目すべきである。

彼は勞働を說くとともに、協同の必要にして緊切なることを說いて、單なる個人的自由を極めて排斥した。單なる個人的自由を基礎とする資本主義にはくみしなかつたのである。

但し、彼はこの個人的自由に基づく資本主義が、オーエン、フーリエの如く正義と人道の自然の法則と相反するものであるからと云つて斥けたのではない。

彼は進化階段に於いて先づ其必要を認めしかる後其衰亡を主張したのである。即ち、個人的自由を原則とした資本主義は、個人を束縛する封建的經濟組織に對しは、充分其存在權を主張しうる。然し、産業に關する彼の史的考察と社會の現狀とは、最早、個人的自由に多大の功獻を期待することを不可能ならしめてゐる。故に、個人的自由を基礎とする資本主義は社會進化の必然なる階段から下つて、そこに新らしい進化階段が現はれねばならなかつた。これが彼の立場であつた。

然らば、新生の社會は何を目的とするか。自由に代る共同を基礎とし、財産或は資本を、勞働者に最大の利益を與へる樣に構成することである。

彼の學說に對する理論的批判はかくの如くである。

次にこれを、その實際的效果によつて見ると、尙幾多の非難を亦、そこに我々は見出すことが出來る。

第一に疑問とされるのは、學者及産業者に、社會改良の重要職務を遂行しうる可能性があるか否か、と云ふことである。

先づ、有産者について之れを考へて見るのに、何れの時代にあつても、勞働者階級が健全なる發達をなすには、殊に早期にあつては、自覺せる或は人道精神の發達せる企業家の助力、又は協同が必要なる條件であるが、彼の考へるが如く、人類全體の健實完全な解放を實現する中心機關の任務を、企業家が遂行することを望むのは、根本的に空想であると云はねばならぬ。彼がかゝる空想を抱いて居つたのは、要之、彼があまりに樂觀的であつたのと、ブルジョア階級の心理狀態を充分理解して居なかつたためでもあらう。然し、ブルジョア階級が社會的首位を占めるであらう、又占むべきであると云ふ彼の豫想は、確かに、事實であつた。フランスに於いて、ブルジョア階級は、ルイ・フイリップ以來、社會的有力者の位置に上つたからである。

又學者について云へば、サン・シモンの考へた如く、大學者は常に政治家としても偉大なものでなかつた。ラプラスの例はこの事をよく示してゐる。

第二に疑義のある所は、政治を産業者及學者の手に移すことによつて、統治形式を變革し、政府萬能主義を破壞しうると彼が信じた點である。

すべて社會に有用な效果をもたらすが故に、政治の眞の對象となりうるものは、權限を有つ人によつて判定されるべきである。從つて、政治はそれらの人の從屬物たるにすぎない筈である。サン・シモンの以上の考察は確かに正しい。然し、政府萬能主義をこれによつて破壞しうるものと信じたのは、彼の妄想である。

産業が彼の所謂政府にとつて代るときには、産業が政府となるであらう。しかも、このことは歴史上未知の事項ではない。「フランスに於いて、或は英國に於いて、東印度會社は一つの政府たる一大産業會社であつた。」しかして、それ程專制的だつたものは疎だつた。

彼の云ふ如く「人々は相互に命令することを止めて協同の努力を自然の上に加へるために結合した」としても、矢張そこには命令する人が當然生れて來る。蓋し、秩序のない社會はないからである。故に、ポール・ジャネーは云ふ、「政府萬能主義は、それを廢止する意圖を持つ制度それ自體によつて、再び現れるであらう」と（註六一）。

以上を以つて彼に對する批評を終るが、要之、サン・シモンは、彼がオーエン、フーリエの如く、唯理主義的に考へた結果である小共同團體による社會改良を計畫せず、現實主義的、進化史的立場から、資本主義的精神の發展そのものの中に、社會改良の基本條件を發見し、將來の社會組織の經濟的基礎を農業に於いて求めず、工業に於いて求めたことによつて、その特異性を充分我々に明示してゐる。彼が當時の社會改良家から、嶄然頭角を現してゐるのはこのためである。

世のサン・シモンを論ずるものは、皆サン・シモンを以つて階級鬪爭理論の先驅者として、或はこれを賞讃し、或はそれを過賞であると反駁することに多忙を極めてゐるが、彼を近世社會主義の偉大なる先驅者として我々が指摘し、論じうるのは寧ろ他に理由を求めるべきである。即ち、明確ではあるが、甚だ斷片的な彼の階級鬪爭理論の發見に於いてでなく、彼が社會發展の理由を資本主義的經濟其のものの中で考究した點である。たゞ、そこにより深い解剖的考察が缺けてゐたため、結果は完全でなかつたけれども。

現代の人は云ふ「すべては勞働者のために、しかして勞働者によつて」と。

サン・シモンはこれに對して云ふ「すべては勞働者のために、しかし勞働者によらずして」と。或は「すべては産業者のために、しかして産業者によつて」と(註六二)。

これこそ、サシ・シモンの學説の最も簡明な表現であらう。

以上述べ來たところは、一種の産業主義としての、或はジャネーの言を藉りれば集權的産業主義(industrisme centralisateur)としての彼の學説である。然し、これが彼の學説の全部ではない。彼には尙殘された二部分、一つは人類愛的人道的及通俗的特長、他は宗教的特長があることを知らねばならぬ。これは、サン・シモンの思想の最後のものとして、「新キリスト教」に公表せられ、且サン・シモニアンに最も著しく影響を與へた。これについては稿を改めて述べることにする。

註一　Saint-Simon, Oeuvres choisies Vol II. p. 344

註二　Georges Weill, Saint-Simon et son ocuvres. p. 108-109

註三　Georges Weill, op. cit, p. 110

註四　三田學會雜誌、第二十三卷第二號、「サン・シモンの歴史哲學と人類の科學」

註五　Saint-Simon, op. cit, p. 447

註六　三田學會雜誌、同上一〇九頁。

註七　Bouglé, C, L'Oeuvre d'Henri de Saint-Simon, textes choisies 1925. p. 137-138

註八　Saint-Simon, op. cit, p. 369

註九　Saint-Simon, op. cit, p. 369

註一〇　Saint-Simon, op. cit, p. 369

註一一　Saint-Simon, op. cit, p. 397

註一二　Saint-Simon, op. cit, p. 398

註一三　Saint-Simon, op. cit, p. 401

註一四　Saint-Simon, op. cit, p. 401

註一五　Saint-Simon, od. cit. p. 401

註一六　技術者とは artisan の譯語であるが、サン・シモンは artisan と云ふ語を、普通世人によつて使用される樣に單なる勞働者(ouvrier)を指すものとして使用してゐない。彼はこの語には特に註を附して、この語は、物質的生産に從事してゐるあらゆる人、即ち農耕者、製造業者、商人、銀行家、銀行家の使用してゐる手代或は勞働者を包括するものであると云つてゐる。(Saint-Simon, Oeuvres choisies Vol II p. 397 Not 1)。從つて、技術者と譯すよりも寧ろ物質生産者とでも譯すべきであらうが、適當な譯語のないため、技術者とした。技術者と譯されてゐる場合、すべて以上の廣い意味を解されたい。

註一七　Saint-Simon, op. cit, p. 397

註一八　Saint-Simon, op. cit, p. 395 Not I.

註一九　Bouglé, C. op. cit, p. 155

註二〇　Weill, op. cit, p. 54

註二一　Leroy, M., Henri de Saint-Simon p. 68

註二二　Bouglé, C, op. cit, p. 165

註二三　Bouglé, C, op. cit, p. 166-168

註二四　Bouglé, C, op. cit, p. 172

註二五　Bouglé, C., op. cit, p. 139

註二六　Bouglé, C., op. cit. p. 147

註二七　Saint-Simon, op. cit, p. 375-376

註二八　ポール・ジャネー「サン・シモン及びサン・シモニズム」大岩誠譯　五三―五四頁。

註二九　Bouglé, C., op. cit, p. 148

註三〇　Saint-Simon, op. cit. p. 366

註三一　Saint-Simon, op. cit, p. 450

註三二　Saint-Simon, op. cit, p. 449

註三三　Bouglé, C., op. cit, p. 133

註三四　Bouglé, C., op. cit, p. 204

註三五　Saint-Simon, op. cit, p. 436

註三六　Bouglé, C., op. cit, p. 192

註三七　Bouglé, C., op. cit. p. 192

註三八　Weill, op. cit, p. 155

註三九　Bouglé, C., op. cit, p. 160

註四〇　Bouglé, C., op. cit, p. 157-154

註四一　Bouglé, C., op. cit, p. 161

註四二　Saint-Simon, op. cit, vol I p. 221

註四三　Bouglé, op. cit, p. 193

註四四　Saint-Simon, op. cit, p. 366

註四五　Saint-Simon, op. cit, p. 368

註四六　Saint-Simon, op. cit, p. 370

註四七　Bouglé, C., op. cit, p. 196

註四八　Saint-Simon, op. cit, p. 375-377

註四九　Bouglé, C., op. cit, p. 139

註五〇　Bouglé, C., op. cit, p. 198

註五一　Saint-Simon, op. cit, p. 382-384

註五二　Bouglé, C., op. cit, p. 174

註五三　Bouglé, C., op. cit, p. 138

註五四　Bouglé, C., op. cit, p. 186

註五五　Bouglé, C., op. cit, p. 187

註五六　Saint-Simon, op. cit, p. 371

註五七　Saint-Simon, op. cit, p. 371-372

註五八　Bouglé, C., op. cit, p. 139-140

註五九　本稿第五節「産業者の意義」參照。

註六〇　Saint-Simon, op. cit, vol I p. 221

註六一　ポール・シャネー著、前掲書　八九頁。

註六二　Weill, op. cit, p. 180

（四、十一、二）